女王の盾

鰐屋雛菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女王の盾

【Ｎコード】
Ｎ３７９０Ｋ

【作者名】
鰐屋雛菊

【あらすじ】
シェルナム王国の都・エルナ・デュガーレが不帰の地となって三ヶ月後、ひとりの青年が彼の地へと向かう。
ヒーロー不在のヒロイック・ファンタジー。

※特に残酷な描写はありませんが、流血シーンはあります。

序〜第一章〈一、或いは序の二〉

冥の災害のあと、一番目の王子さまは、ふたりの弟王子と末の妹姫に言いました。

「島をきれいに四つに分けて、それぞれを治めることにしよう」

「それはいい！」

弟妹たちも家来たちも一番目の王子さまに賛成しました。

こうして『名を秘したる女神の島』に、四王国が誕生したのです。

「建国の伝承」より

序

砂に染まる風が、痛いほどに渇いている。

旅人たちの標であった轍（わだち）は、百年の時をかけて刻まれ、たった一月で風紋に埋もれた。その標を頼りとする旅人もない。四王国中もっとも富み栄えたシェルナム王国が、いま死に行こうとしていた。

無形なるものの死もまた、血肉を有するものの死と同様に、心の臓の停止によって脈動を止め、やがて朽ちて行く。砂に、時に埋もれて行く。

だが、死とは腐臭を纏（まと）う。実体なくば腐敗とも無縁のはずが、死は潰えの美学を頑なに貫こうとする。国家という無形なるものの有終を、その血肉と模されるにんげんの、はらわたを曝した屍で飾らんと欲するのだ。斯くして生身の贄が、うやうやしく献上される。再生のための饗宴である。

この物語はその饗宴を語らない。その饗宴にいたる因を記す。

ゆえに英雄は、存在しない。

第一章

〈一、或いは序の二〉

初夏の陽射しに灼かれた大地は、色が抜け落ちてざらついていた。水を映す鮮やかな空の青ですら目を刺す。

シェルナム王国は交易で栄える国だった。栄華の始まりはおよそ百年前、リリス二世の御代に遡る。以後、王都より東西南へのびる街道は、国家の大動脈として人を物を、絶えず運び続けてきた。三月前、心の臓たる都が沈黙するまでは。

己が意義を失い、茫然と横臥(よこた)わる街道と、それを取り巻く涸れ野とはもはや分かち難い。

灼熱が凍りついていた。

この調和を乱す異分子は、やがて東よりやって来る。足早でしっかりとした歩みに、丈長いマントの裾を重くはためかせる旅装の男。少年と呼ぶほどに幼くはなく、精悍さを醸(かも)すにはまだ若い。そんな男である。

名をユリスリートと言う。

名のほかに何も持たぬ男であった。

これについては、おいおい語る。

男??ユリスリートは、王都エルナ・デュガーレへの道を、ひたすらに急いでいた。八百年の歴史を持つ、四王国中でもっとも古い都。女神の真珠と讃えられし、壮麗でいびつな巨大都市。そして三月と四日前、女王チェスカレイア四世をはじめ、十万の民を飲み込んだ、不帰の地へと。

〈二〉

砂煙を上げて迫り来る。ユリスリートは迷わず手荷物を投げ捨てた。たった三頭。されどその馬蹄の轟きは、鞘走りの音を当たり前にかき消す。

先頭に一、後方に二。互いの距離が緩い。獲物を定めてなおあの広がりよう、包囲を目論むに半端な広がりよう。密集移動ができぬ素人と知れた。

一の呼吸にて、先頭を躱(かわ)す。

身を低く、体を崩さず。振り下ろされた切っ先のうなりが耳元を、鐙(あぶみ)の錆色が目の端を掠めた。

二の呼吸で砂塵の切れ間、対峙した後陣の左翼が、驚愕にその目を見開く。

相手が待ち構えているなどと、思ってもみなかったのだ。

短い悲鳴と、舌打ちが重なった。石を削るような抵抗に、ユリスリートは素早く剣を引く。

滑り込ませた刃は、骨に阻まれた。四肢の連動に微妙な誤差がある。二月余り、身体を遊ばせていたツケか。

三頭の馬が駆け抜けたあと、辺りは黄色い靄が立ちこめて昏(くら)い。そのただ中、一人残されたユリスリートは目を細めた。

万全ではない状態で、三人の敵。しかも騎馬。加えてこの陽射し、このだだっ広い荒野。

最悪だ。

思わず歯が軋(きし)む。だが、その憂慮は意外な形で軽減される。

蹄の音が止んでいた。目と鼻の先にぽつねんと、照りつける陽光を弾く白刃。浅傷を負った男は、あろうことか剣を取り落としたらしい。遠く怒鳴り声と馬の嘶(いななき)に目を転じれば、果たして二つの騎影が遠ざかって行く。

あれしきで怖じ気づいたのか。

独り気勢を上げて向かってくる賊の、その形相は。
猛りより怒りより、悲壮感に満ちていた。

やはり、とユリスリートは剣を握る左手を見る。旅に出るまでの二月を、半病人のように過ごした。身体も勘も鈍っている。幸い斬られたのは、マントの肩口と数本の髪だけ。運が良かった。
剣を収めると、背に払ったフードを再び目深にかぶる。動かぬ主の傍ら、痩せ馬が気弱そうな鼻息をもらした。
哀れには思わない。まばらな顎髭が不精のせいでなく、文字どおり未だ生えそろわない小僧っ子だったことも、仲間に裏切られたことも。一歩間違えば、ああして地に転がっていたのは自分なのだから。感慨があるとすれば、灼熱と呼ぶに相応しいこの時期この時刻を選んだ、その正気を疑うくらいだ。
太陽に追われ太陽を追い、その姿が見えなくなるまで歩き通す日々も、はや半月。疲労の色は濃い。馬が手に入ったのは幸いと手綱を引く。
鞍嚢の中を物色すると、使えそうな物は岩塩と水、干したナツメヤシの実が二粒。軽い金袋とそれらを抜き取って、あとは袋ごと遺骸の側に投げ棄てる。
四王国中もっとも栄えるシェルナムも、交易が停止すれば、途端に困窮する村々はまだ多い。さらに王都は閉ざされ、女王も行方知れずとなれば。
押し殺した不安の底で、乱の気配が胎動を始める。
旅路の途中、戦の噂をそこかしこで耳にした。二大貴族は表面上手を取り合い、女王救出を声高に叫んだが、水面下では戦支度に余念がないことだろう。数日をかけて通ってきた、一方の領袖アーテルム伯爵の領地では、鍛冶屋が繁盛していた。大っぴらに募兵が行われるのも、そう遠くはあるまい。
あの若者達は、そんな気配に飲まれて田舎を飛び出した、農家の小倅と言ったところか。

足下に蹲(うずく)まる影を測り、非難がましい馬の視線に構わず、その背にまたがる。入城は翌日になるはずだった。全くもって不幸中の幸い。

急がねば。

なぜ。

湧き上がる焦燥に、反問が覆いかぶさる。

降り注ぐ陽光の眩しさに目を庇い、押し留める熱風に抗って足を踏み出しながらも。ようやく見つけた木陰で、砂まみれの干し肉を噛んでいたときも。満天の星空の下、剣を抱えて眠り落ち行くさなかでさえも。王都へ向かうと決意してより、それは延々と繰り返されてきた。

衝動の根源は定まらず。反問の答えは見つからず。

正気の沙汰ではないと、他人を非難できようか。

肩越し振り返れば、どこから来たのかどうやって知ったのか、早くも二、三の蝿が飛び交っていた。彼らはこの炎天下のもと、もっとも勤勉な存在だろう。

踵(かかと)で軽く馬腹を打つ。意に染まぬ新たな主の命令に、しかし馬は素直に従った。

〈三〉

シェルナム王国王都エルナ・デュガーレは、在り続けながら失われている。まるで時間（とき）の綾に、からめ取られてしまったかのように。

振りかえれば、捩れたなびく藍と紫の紗が、無限に思えた蒼天を閉ざそうとしていた。砂を舞い上げる熱風も今は静まり、むしろ肌寒い。そんな中、落日の茜に染まらず長い影を落としもせず、何者も例外があってはならない事象に素知らぬ顔で、花曇りのくすみに沈む千年の都。

南北にのびる城壁の、その規模、高さは、まさに無用の長物であった。「名を秘したる女神の島」を支配する四つの王家は、同根の出自である。建国以来、暗黙の不可侵を守り、七百年以上戦乱のない歴史を紡いできた。過去、あの頑健な石壁にはね返されたのは、せいぜいが十数人寄り集まった、野盗くらいなのだ。

権威の誇示とは、そんなものだろう。

馬上、革袋に残る最後の一滴で、ひび割れた唇を湿らせ、ユリスリートは皮肉とも、諦めともつかない答えを導き出す。どちらでも良いような気がした。どちらでもないような気もした。名のほかに何も持たぬ男に、そもそも権力者の都合など、無縁なのだから。

手綱を緩め、再び馬を進める。ところがその脚は、幾らも行かないうちに止まった。そして凝っと耳を伏せ、頑として前へ、王都へ向かおうとしない。僅か数時間の付き合いながら、この痩せ馬が見かけより利口であることを、その背を借りるユリスリートは気づいていた。

「そうか。厭か」

東の大門「晨明門（しんめい）」が、砂色の城壁に黒々と口を開けているのが、遠目にも見える。ユリスリートは鞍上から降り立ち、労いにその首を撫でてやった。胴震いをひとつ、黒目勝ちの潤んだ目が、何かを訴えている。

「いいんだ。行け」
手綱を引いて、南下するよう促す。王都に一番近い村が、その先にあった。
「じき日が暮れる。気をつけて行け。お前達はどこでも重宝される。心配はない」
小さな農村は、街道沿いに位置しながら王都には近すぎて、交易の恩恵を授かり損ねた。村人は今も細々と畑を耕し、その作物を都の朝市で売って、生計を立てている。きっと迷い馬を歓迎するだろう。
指示通りの方向へ、とぼとぼと遠ざかる栗毛が、薄闇へ溶け込む前に、ユリスリートは背を向けた。名残を惜しむほどの間柄でもない。
歩く。振り返らず、躊躇わず、淀みなく、力強く。利口な痩せ馬が厭うた先へ、畏(おそ)れた先へ、駈け出したい衝動をすら抑えて、歩く。
急げ、と。何かが急き立てる。反問が追いつく前に、進めと。
前兆れなく、靴裏から伝わる確かな支えが、自らの足音が消えた。忍びくる夜気に冷めはじめた砂の、鼻腔にからみつく埃っぽい匂いが和らぐ。昼と夜が混じり合う景色が、揺らめいた。
それはただの眩暈(めまい)であったのかもしれない。水は底をついていた。まともな食事を摂ったのも、二日前に立ち寄った村が最後だ。疲労の蓄積は、言わずもがな。
あの歪(ひず)みは、世界に起こったのだろうか。それとも自身に起こったのだろうか。のち、この時を振り返り、幾度も考えた。
ユリスリートが答えを得ることは、遂になかったのだが。

生きている。
色彩の極を削ぐ、靄立った明るさですら、夜を受け入れようとしていた目には眩しい。
呆気なく。

実に呆気なくユリスリートは、境界を越えていた。
周囲を見渡し、空を仰ぐ。足下に目を落とす。
風は凪いで、大気はしっとりと重い。隙間ない雲を、透かして届く日の頼りなさに、影もまた、茫と滲(にじ)んでいた。
生きている。
この終焉の地に立って、今更ながら気づく。死を予感せず、まったく無防備であった自らに。
互いの牽制と時間稼ぎ、そして叛意を蔽(おお)うため、二人の貴族は女王救出のお題目を掲げ、百人の兵を王都へ送り込んだ。それが二月以上前である。未だ誰一人戻らず、彼らが辿った運命を知る術もなく、絶望と忌諱(きい)に塗りつぶされた想像に、人々は沈鬱な面持ちで囁き合った。
王都エルナ・デュガーレは、帰らずの地。冥の門が、彼の地で口を開けたに違いない、と。
当に正気の沙汰ではない。思うと同時、こうして生きている事実の前では、どうでも良いことだった。むしろ。
「どうだ。満足か」
独りでに、こぼれ出る。王都へと駆り立てた何かに。声に出して、問わずにはいられなかった。あの衝動は確かに、身の裡より湧き出でたが、それでいて、ユリスリートとは無関係であったからだ。無関係なまま、霧散してしまった。
王都が閉ざされたのは、雨季の到来直前のことだった。以来、時が移ろおうとも曇天の中、夜闇をすら寄せつけず、荒野に居座る怪異となった。
宵の空に、星が次々と瞬きはじめ、上弦の月が、地に這いずる人々を嘲笑うあの時とここは、間違いなく遊離している。
来し方は戻らず。果て霞む荒れ野は、茫漠たり。
ユリスリートは、一歩も進めなくなっていた。彼を突き動かし続けた何かは、跡形もなく消え、後戻りも叶わず。行く末を託す先は唯一、過去に繋ぎ止められ、廃墟の如く静まり返る王都のみ。疲れ

切った足の、踏み出す気力を根こそぎにするには、充分であろう。毒づきたくなるにも。

弱々しく明滅する光点がひとつ、右手に戯れていた。羽虫の類かと、億劫に払いのける。するり、逃げた。逃げてまといつく。虫、ではなかった。それは唯(ただ)、光であった。

精霊、其は世界を支えしもの也。

「名を秘したる女神の島」に伝わる、創世の紀第一節である。誰もがその存在を信じ、誰もがおいそれと見ること叶わぬ、生命の源。それこそ、人並みの敬虔さも持ち合わせないユリスリートの前に、顕現するなどあり得ない。

だが、ここは世界の埒外。

この儚き光は、いのちそのものでありながら、肉持たず、生命体ですらない精霊なのだろうか。ユリスリートは半信半疑に手をかざす。

緩やかな明滅が、やがて彼の搏動と韻を一にする。未知と既知のはざま、安らかなる忘我へと誘う。

水の滴りを聞いた。腐敗の匂いは、土の豊かさを約束する。その奥底で、絶えず滾(たぎ)る炎の塊が吹き上がり、轟然と傾(なだ)れ来る。飲み込まれる寸前。

彼方で刻を告げる鐘が、鳴り響いた。

ユリスリートは弾かれたように、そそり立つ城壁の向こうをふり仰ぐ。等間隔で、ゆっくり七度。王都で最も高い建築物、大鐘楼の冴え冴えと澄んだ音はしかし、この奇跡の邂逅の添えものとしては、あまりに無粋であった。

熱い。

再び無音が訪れたとき、ようやっとユリスリートは我に返る。精霊かと思えた小さき光は、もうどこにもいない。

ただ、右の掌だけが、仄(ほの)かに熱を帯びていた。

〈四〉

あの日。

今日は降るか、明日こそ降るかと、焦れる人々に肩すかしを食わせ、あの日も太陽は姿を見せないまま、うすらぼんやりと夜が明けた。花冷えというには、時期遅れの寒さが続いた三日目のこと。

東の地平がほんのり白むと、あたかも雲の真綿ごし、じわじわと蒸されるように寒さはやわらいだ。引き替えに、むう、とのしかかる濃密な大気が、荷車を曳く驢馬や馬の足どりを、心なし重くしていた。

晨明門は、エルナ・デュガーレにある三つの大門のうち、もっとも往来が激しい。それも早朝は、街道から外れた、小さな町や村へと向かう行商人、朝市を目当てに、近隣の村々からやって来る青物売り、個々の都合で旅に出る者らが、ちらほらと行き交うに過ぎない。ましてつい一月前に、女王生誕祭が盛大にとり行われた祭りのあと。丁度そこはかとないもの寂しさが、虚脱にとって代わられる頃合いだった。

一人の中年男が、大きな背嚢（はいのう）を背負って、開門と同時に出立した。ねづ茶の上っ張りの下は、南方風の風通しのよいシャツと、筒広のズボン姿。肌の色は浅黒く、頬は福々しい。

交易によって、南方亜大陸からシェルナム王国へと、さまざまな物品が流入したが、それは同時に人の交わりでもあった。男はそんな交わりによって、遠く故郷を離れたこの地に、根を下ろした者の子孫である。都で仕入れた品を地方へと売り歩く、行商を生業としている。

歩調に精彩を欠くのは、荷の重さゆえでもなければ、馴染みの女に後ろ髪引かれているのでもない。自ら吐く息が酒臭い。頭が、がんがんする。昨夜の上機嫌が、今朝の不機嫌を引き起こしているのだった。こうして毎度、重い荷物に加え、頭痛と吐き気と後悔を抱

えて、男は旅に出る。
その軋む頭蓋の騒がしさが、しゃらん、と軽やかに吹き抜けた、一陣の涼にさらわれた。
男には錫杖の鐶(かん)の音だと、即座に分かった。裕福な者には巡礼のおり、ぴかぴかの錫杖を仕立てるのが、近頃の流行りらしい。行商に出れば、必ず一度はそうした巡礼者を見かける。
それにしても、これほどに涼やかな音は聴いたことがない。どんな大人だろうか。
こっそり上げた目は、すぐまた足下へ落とされた。
異様な風体の男達であった。
巡礼のしるしとして、つるばみ色の布を頭から被ってはいる。だが、そこから覗く眼光の鋭さは、到底しおらしく女神と精霊に、感謝を捧げようとは思われない。発される険呑な気配が、あからさまにすぎる。
一人は明らかに若い。荒い麻布を巻いた、先端が奇妙な形ちの、棒状の物を肩に担いでいる。上背こそ人並みながら、丸太のような腕は隆々として、はち切れんばかりだ。錫杖を手にしたもう一人は、見上げるほどの大男で、年寄りにも見えたが、その歩みは三十路半ばの行商人より、きびきびと力強い。
「間に合うたであろうか、兄者よ」
擦れ違いざま、そんな会話の切れ端がかすめた。若い男の声は、見かけの強面ぶりに似合わず、変声期ただ中の少年めいて、芯が細く不安定であった。年嵩の大男が何やら答えたが、鐶の音が邪魔をした。
妙な訛りがあるな。
年中あちこち旅して回る行商人にも聞き慣れぬ、微妙な違和感。微妙だからこそ、耳についた。
彼らは、どう見てもただの巡礼者ではない。一介の商人すら怪しむくらいである。これは一悶着起きる予感がする。
城門警護の警邏隊(けいらたい)第三分隊は、都を飾る花の一叢。あざやかな緋

色の制服姿が凛々しき隊員達の、そろって容姿端麗なるは、まさに美貌で名高き女王の治める都に相応しい。されど侮るなかれ、置物にも非ず。

野次馬根性を抑え込んで、足は前に進みつつ、耳は遠ざかる鐶の、快い音色を追っていた。

不意に。

ひどい耳鳴りに襲われた。

目映い光の奔流が、凄まじい勢いで、身体をすり抜けて行く。眩しさと恐ろしさに、両の腕で顔をかばった。

それはまたたく間のこと。

耳鳴りが消えた。鐶の音も、消えた。

おそるおそる目を開ける。前景に変わりはない。曇り空の下、日も影も差さぬ灰色の荒野が広がっている。右手に驢馬の曳く荷車が、何事もなかったように、街道をそれて行くのが見えた。車輪が小石を踏みしだく音も、辛うじて聞こえる。

背後を見た。

ぞっとした。

くだんの二人組が、いない。同じく門を出た二人三人が、あとに続いていた。その姿もまた忽然と消えている。門の両脇で、槍を手に控えていた緋色は一体どこへ。

思いのほか、城壁から離れていた。重い荷物を背に、二日酔いの足で、いつの間に。歩きながら立ったまま、居眠りしていたわけでもあるまいに。

混乱のうち、一歩あと戻りする。だが次の一歩が踏み出せない。早鐘のように鳴る鼓動が、行くなと言う。冷たい汗が、つと流れ、顎からしたたり落ちた。それを契機に、逃げるように王都をあとにした。

この行商の男が、大いなる難を逃れたと知るのは、ずっと後のことである。

ある地点から、王都エルナ・デュガーレの晨明門まで。奇しくもユリスリートは、幸運の行商人とほぼ同じ道筋を、逆に辿ってきた。但し、その一致は空間的なもののみ。時間的には三ヶ月、九六日の開きがある。ひとつだけ、彼らは類似の体験をしている。

城門が思ったよりも近い。

眩暈のような、五感のゆるみのあと、ユリスリートは晨明門の、ばかばかしいくらいに高い、アーチ型の天頂部を、見上げる恰好にあった。城壁に開く暗い門は、つい数歩前まで、確かに遠景として、その目に映っていたはずだ。

この捻れに、しかしユリスリートは、然したる注意を払わなかった。そのゆとりがなかった。

鐘の音の余韻が去ったあと、戻ってきた静けさが、異様に感じられる。あれは不安が生んだ、幻聴だったのだろうかと思えてくるほどに。

一定の間隔で七度。偶然は、あり得ない。何らかの意思が、働いていると考えるべきだ。時鐘と決めつけるのは、短絡にすぎるか。

掌の中心に、まだ熱が残っていた。きつく握りこんで、小さな不調和を散らす。

二重の城壁を穿つ暗がり。その先は出口へと繋がっている。

いや、入り口か、とユリスリートは独りごちた。

短い隧道（ずいどう）に、靴音が冷たく響いた。

〈一〉アスナン

その日もアスナンにとって、変わりばえのない一日のはずだった。少し早めの夕食を居酒屋「兎の尻尾」亭で済ませ、国立図書館へ弁当を届け、締めくくりに仮宿で酒を食らって、いつとも定かならぬうち眠り落ちる。陸(おか)に上がった船乗りの無能さよと笑う口ぶりには、酒臭さよりも自虐の匂いがふんぷんとしている。そんな無為な日々の延長線上にある今日、昨日と同じ今日であるはずだった。

それでも酒に逃げることはなくなった。軽口を叩いて笑えるようにもなった。失った女の夢を見ることもいずれなくなるのだろうと、最低の寝覚めを甘受するようになっていた。

どん底から一段這い上がったあたりで停滞している日常に、慣れてゆくのをアスナンは感じていた。静止する空に慣れるように、アスナンだけではない王都の住民すべてが、この不運に慣らされつつあった。

「ラース、七の鐘が鳴ってるぞ」

大鐘楼の鐘の音は、客の賑わう店内にも聞こえたが、煮炊きをくり返す厨房ではかき消されてしまうらしい。髭面の巨漢が、漆喰壁の向こうからがなり立てる。

「なんか言ったか」

「七の鐘が鳴ってる」

巨漢は面倒臭そうに宙を見上げると、壁の向こうへ一度引っこんだ。

「やれやれ、今日は何かあったか」

ややあって手提げ籠を手に厨房から出て来るなり、店内を見まわす。

居酒屋「兎の尻尾」亭は、連日荒くれ者でにぎわっている。亭主のラスティオの人柄と料理は、傭兵達にことのほか評判がよかった。ちょうど夕食時のこの時間が満席なのは常ながら、今夜はとくに客

の流れが早い。
「なんでぇ、知らねえのけ」
アスナンの隣で皿をつついていた男が、きつい南部訛りで口をはさむ。
「今夜ぁライサラの店に、踊り子が立つ日さ」
空堀と高い塀に囲まれた、王都南西地区のミーザム街は、もともと貴族階級の別邸が集まる特殊街区であったが、いまは南方人の占拠するところとなっている。彼らは王都が閉ざされたときいち早く、かの地を獲るべく行動を起こした。その後は他の地区との唯一の通行路となる橋の袂に詰め所を置いて、人の出入りに規制をもうけている。様態こそ変わったもののミーザム街は現在も、王都でもっとも安全な地区であった。そのため居住者は南方人のほかに女子供が多く、食うに困った女達がたどる道は言わずもがな、理不尽な暴力からは逃れえたものの、彼女たちはくちすぎのために春をひさいだ。
ミーザム街の話題に加えてライサラの名を耳にし、アスナンの頬が強張った。南部訛りの話に生返事をひとつ寄越したラスティオが、手提げ籠を押しつける。
「おめえは仕事だ。くっちゃべってねえで、とっとと行きやがれ」
乱暴な言い様とはうらはらに、かち合ったまなざしには労りがにじんでいた。その気づかいがアスナンにはありがたく、同時に情けなさ不甲斐なさに嘆息する。
急き立てられ、顔見知りと途中とちゅう目であいさつを交わして店を出た。いつもよりほんの少し遅くなったが、北東地区の商店街に変わりはない。まばらながらも通りに人が行き交い、店は客を快く招き入れている。失われた活気が戻らなくとも、どうにか人間らしい営みは続けられているのだ。見上げれば、刈りとったばかりの薄汚れた羊毛に似た雲が、隙間なく空をふさいでいる。雨季を心待ちにした人々は、とうにそんなことを忘れているのに、置き去りにされた空模様はいまだ潤んだままだった。夜の瞼に伏せられることもなく、たったいま息絶えた者の目のように。

うつろわぬ日々を、日々と呼べるのだろうか。いってみれば爾来、王都は大凪に見舞われている。そして当たり前だが、船乗りは凪を嫌う。海が空を映すだけの鏡面と化している間、緩慢な恐怖が屈強な男達を支配した。その緩慢さでもって、じわりじわりと暗示をかける。すなわちいずれ世界のすべてが、この海と同じく停止するに違いないという思いにとり憑かれるのである。凍りつく瞬間の、永遠へ連なるまのびした瞬間の、その途次に立っているのだと思えてくるのだった。

互いの血肉の熱を確かめ合う相手を失ったアスナンに、凪の暗示は執拗にまとわりついた。海では容易に追い払えたものが、なぜか陸ではままならない。足下の確固さに、ヒトの孤高なんぞ埒もないと笑殺されて、凍りつく世界の幻想に囚われた。そうして自らの生を確信できずにいる。そんないつもどおりの今日も、じきに消化されよう。

実感がなくとも、それが生きているということなのだ。

〈二〉グラシェス

王都の中央とはもちろん北部の王宮であり、それとは別に存在するもう一つの中心こそ中央広場である。エルナ・デュガーレは四王国以前に「名を秘したる女神の島」の北西部全域と南西部の一部を支配した、ハーシュラン王朝の初代王ラジナッドによって開かれた。拡張を重ねて無様にふくれ上がった「女神の真珠」だが、このとき定められた都の基点は不動であった。

建国以来シェルナム王国の守護精霊は「風」とされ、いつのころからか象徴として、この基点に風の精霊像が据えられるようになった。愛らしい少女の姿を借りた銅像は、敷石でえがかれた幾何学模様と、方位を示す八つの泉にとりまかれ、いまも砂色の台座の上でほほえんでいる。口もとは慈愛に満ちて、しかし造形物の限界か、まなざしは冷徹に民を睥睨していた。一説によればこの少女像は、南方交易によって王国に巨万の富をあたえた賢君リリス二世の似姿だという。

その広場のあちこちに、人の群れがわだかまっていた。多くが三人から五人くらいの少人数で、腰に剣をつるしあるいは手に槍を携えている。北の王宮から引き上げてきた傭兵達である。

そもそも王都エルナ・デュガーレは、荒野のまん中に忽然と現れた感のある巨大都市だが、十万と号する人口は豊富な地下水によって支えられていた。幸いその水量は、事後もおとろえることなく湧出しつづけている。この恩恵は計りしれない。渇きは身も心もささくれさせる。むくつけき男らが、冷たいわき水で喉をうるおし、傷口や武具を洗い清めながら歓談する様子は、表面上はたいそうなごやかであった。水は王都に閉じこめられた人々にとって命綱である一方、心延えにも潤いをあたえている。

さて。かの者達を「傭兵」と総称するには、実のところ語弊がある。単なる破落戸（ごろつき）、兇状持ちの無頼漢もいれば、なんの因果でか至

極まっとうな人生のなかばで突きあたったこの受難に、やむなく剣を手にした者もあった。しかし個々の事情や前歴に配慮していては、この徒輩めらを一群として扱えなくなり、のちのち雑多不明瞭をひき起こそう。ゆえに便宜上、武装したにわか徒党のやつばらをも含めて「傭兵」と呼ぶこととする。含めてというからには、その身分職業がもとより雇われ兵であった者もいる。たまたま王都に居あわせた不運の数人と、大義という名の悪意によって送りこまれた百名のうち、混乱のさなかに先見の明をもってして生きのびた、渡世巧者ともいうべき数十人だ。

彼らを率いる長、名をグラシェスといい、その目線を正面からまっすぐ合わせられる者の稀なほどの大男であった。だんびら振りまわす生業にふさわしく筋骨たくましい体躯を誇り、しかして大味な面相のふたつの眼(まなこ)はいつもねむそうに侮りを誘っていた。曲者にはちがいないが、傑物と呼ぶほどの者でもない。それは本人もよくよく弁えていて、むしろそれこそが強みであった。身の丈を知っていれば、大失態をやらかさぬものだ。

「名を秘したる女神の島」で一般に傭兵といえば、隊商の護衛として雇われる武装兵を指す。グラシェスは十人に満たぬ手下(てか)を従えた、ごく平均的な規模の傭兵団をひきいる、ごく平凡な傭兵団長だった。世には生涯に百の野盗山賊の類を退治て名を馳せたり、女だてらの女伊達に人形芝居の人気演目ともなるような名物団長もいるが、そうした派手派手しい所業活躍に比肩する何も持たない凡百の徒であった。これは元来が野心些少にて、労を厭うものぐさな性状に由来するところも大きい。

閉ざされた王都で完全に秩序が失われていたのは、おおよそ三日間に相当するとされている。それ以前も以後も、法は正常に機能していないが、完全な喪失状態でもない。少なくとも身にしみついた良識は、そうそう簡単にはぎ取れないものだ。「暴の三日」と呼ばれる徹底的な秩序破壊は、善良なるひとびとが耐えきれぬ恐怖に自らそれと同化し、獣性をむき出しにした数日間の悪夢であった。そ

の乱流のなかでグラシェスは、理性を手放さず胆力を発揮した数少ない一人だったのである。
　こうした経緯から、三十数名を率いる一勢力の領袖におさまった男の半眼がいま、場違いな人影をひとつ捉えていた。雨待ちの重い空は明けも暮れもしないが、大鐘楼の鐘はついさきほど七度響きわたったばかりだ。宵の口のこの時刻に、花の都の中央広場において本来ならば、手に手に武器を持ち、思いおもいの防具で身を固めた連中のほうこそ場違いであるから、このこと一つとっても、傭兵達が閉ざされた王都で、如何にのさばっているのかが伺えよう。
　グラシェスの視線の先で足早に広場を横切る男は、一見して南方人のような出で立ちである。膝までとどく丈長のシャツに幅広のズボン、足下は素足に薄べったいサンダルをつっかけている。ただし軽装とはいっても丸腰ではなく、半端な長さの剣が剣帯に吊されて、腰の左側でおさまり悪く揺れていた。常時武器を手放せないのは王都にあって、もはや自明の理なのだ。
　北の泉にたむろする一団は、グラシェスとその手下であった。総勢十一名の男達はほぼ無傷で、身繕いもあらかた済んでおり、空腹を訴える声がちらほらあがり始めていたが、頭領のグラシェスがいっかな腰を上げようとしない。古顔の一人が、なにやら楽しそうな視線の先を望見して、なるほどと合点した。
「ありゃあ、船乗りの野郎っすね」
　顔つきに反して、おうともうんとも判然としない、妙に歯切れの悪い返答を寄越して、グラシェスは手下共に視線を転じた。そうして何を思い立ったか一人肯くと、立ち上がりざま傍らの古顔にあとは任せたと言い置いて歩き出す。
「かしら、どこ行くんですかい」
　仰天して呼び止める声に振り向きもせず、ちょいと野暮用よ、と手を振ってみせる。
「冗談じゃありやせんよ。あんたを一人にすんなって、ヨールの兄貴にきつくいわれてんだ」

「俺は、乳母日傘のお姫(ひい)さまかよ」
笑い飛ばす大男のうしろを古顔が追えば、あとの九人も互いの顔を見合わせ、結局はつき従うしかない。
「おいおい、俺にかまうな。ヨールにゃ適当に言っとけ」
しかし古顔は譲らず、むさ苦しい一団がグラシェスのあとにぞろぞろと続く。向かう先は場違いな船乗り??アスナンの目的地である国立図書館だった。

〈三〉図書館長

都大路は中央広場より延びる。この中心地に接する建物の中で、ひときわ厳粛な佇まいを誇っているのが国立図書館であった。

「遅い」

扉の中ほどから降ってきた声に、アスナンは愛想笑いを返した。両開きの大扉は、ひと一人の力では開閉不可能な重量を持つ。そのため向かって右側には覗き窓が、左には大人がくぐるにはやや腰を屈めねばならない小扉が切られていた。

シェルナム王国国立図書館は、国有施設としては例外的に学士院の管理下にあり、また蔵書数はおよそ三〇万巻と、規模は決して大きなものではなかった。ただし彩色図鑑や南方経由で入手した外国書籍など、稀覯本の類は多く、四王国筆頭といわれる。

尖頭アーチを押し出したような、高さと奥行きのある石造りの外観は愛想なしもいいところで、顔ともいうべき正面の壁には装飾らしい装飾のないのっぺらぼうであった。唯一ひとの目を楽しませるのが、丈高い青銅製の扉をおおう精緻な浮き彫り彫刻だが、そこには七つの場面から成る、初代館長にして王国に高等教育機関の創設を実現したある学士の生涯が描かれていた。工芸的価値を抜きにすると、まこと説教くさく外連味に欠ける。また学士院なる学問の虫の巣窟は、教育の普及という地道な国力の底上げを目指した創始者の志を綿々と受け継ぎ、会員のなかから特に高邁で清廉な人物を歴代館長として選んできた。現館長もこの薫陶をうけし者である。

「店がたて込んでたんだよ。これでも急いで来たんだぜ」

覗き窓からぎょろりと見おろす金壺眼はトカゲに似ていた。髪も眉も髭も薄く真っ白で、頭蓋骨に乾いた皮膚をいい加減に貼りつけたような皺深い顔は、実際よりもずっと老いて見える。この貧相な老人こそが、国立図書館長である。

「何が急いで、じゃ。おぬしが広場を横切る姿なんぞ、ここから丸

見えだわい」
ふんと鼻を鳴らして、老人は憎々しげに下くちびるを突き出した。
「どうせなら、もっとましな言い訳をしたらどうだ」
アスナンは返答に窮して口ごもる。今日まで会話らしい会話をしたことはなく、まさか絡まれるとは思っていなかった。
「なあ、じいさん」
「館長じゃ」
高邁で清廉なはずの人士は、すっかりへそを曲げていた。もともと気むずかしい人物であったらしく、実子のラスティオとは犬猿の仲である。この災厄が起こる前は、なんと三年以上も口をきいていなかったらしい。
「そうだったな。こいつは失礼、館長さん。とにかくさ、俺も色々しがらみがあって、素通りできない相手もいるんだよ」
「ろくでもないしがらみなんぞ、私の知ったことではないわ」
にべもなく言い放つこの老人、実はある理由で三月近くも図書館に立て籠もっている。その強情さを承知している息子のラスティオは、絶縁状態にあるとはいえ、まさか干涸らびてしまうのを放ってもおけず、朝と夕に食事をとどける羽目になった。しかし夕刻は店がある。そこで代理としてアスナンが、こうして日参しているのだった。
「大の男が仕事もせずに、昼間からぶらぶらしておるかと思えば、酒まで喰らいおって。嘆かわしい」
「船乗りにとっちゃあ、酒は水がわりなんだよ」
「水だけはこの王都にたんとある。酒をかわりにする必要はなかろう」
このままくどくどと説教が続くのだろうか。困惑するアスナンをよそに、図書館長の口舌は淀みない。
「よいか。男子たるもの、学を厭わず労を厭わず孝を厭わず忠を厭わずじゃ。また女色と酒食には、常に節度をもって向き合わねばならん。断てというのではないぞ。私もそこまで野暮ではない。東方

の聖人曰く、唯酒は量無く……」
　弁当入りの手さげ籠を国立図書館までとどける。その距離はたかだか四半時ほどで、子供のつかい程度の労働だ。これに「兎の尻尾」亭での一食という割のよい報酬が支払われるのは、ラスティオの厚意にほかならなかった。しかしだからといって、うるさ屋の父親の話し相手なり鬱憤のはけ口なりになってやるのは筋がちがう。
　受け渡しはあの覗き窓から垂らされる鉤縄に、籠をかけて引き上げてもらうという方法で行われていた。図書館長が縄を下ろしてくれねば仕事は完了しない。
「しかし乱行に及ばぬとて、いつまでも腑抜けたように過ごしおるのは感心せん。どうせ頑健なことくらいしか取り柄がないのだから、額に汗して働かぬか」
「こりゃまた、ひでえ言われようだな」
　随分ないわれようだと思いつつ、その言い分も苦笑もこらえたアスナンだったが、意外な代弁者が現れた。声も口調もよく知っている、天の助けとなり得そうもない人物の登場に、何もかも放り出して逃げ出したくなる。
「こ、この盗人めが、何用じゃ。失せよ！」
　アスナンへ大人げなく因縁をふっかけていたときでも、老人特有のしわがれた声は低く重々しく威厳にみちていた。それが一気に裏返る。怒り心頭に発し、血気は瞬時にして頭頂に達す、トカゲに似た顔貌はいまや鬼の形相で、頭のてっぺんから湯気を吹き上げそうな勢いであった。
「ここはいわば知の入り口、汝（うぬ）のような不心得者の来るところではない！」
「なんだなんだぁ。ラスティオの飯はじじいの説教も込みの駄賃か。そいつはちと割が合わねえんじゃねえか」
　なあ、とばかり同意を求めて背を叩く手に、飲みこんだ非難がため息となってあふれ出る。アスナンはこの大男と妙に馬が合った。三月足らずの付き合いながら、今や気のおけない間柄だ。だがどう

いう意図か、ときどき他者の心情を故意に逆なでするところがあって、これがどうにも困りものであった。
「じいさんを憤死させる気か、グラシェス」
「ラスティオに恨まれるか感謝されるか。どっちだと思う」
小声でたしなめれば、友人の親子関係を茶化すにしても不穏当なもの言いが返ってきた。
発端はいたって単純だ。ある日、図書館から数冊の本をグラシェスが持ち去り、あろうことか焚きつけに使用した。その中には写本作成中の、再入手困難な一冊が混じっていた。こうして貴重な知の財産がひとつ、世界から消滅したのである。このまったく庇いようのない一件以来、グラシェスは図書館長に仇敵とみなされている。そしてこれこそが、老館長の籠城の原因であった。
平時の傭兵は警備業といえるが世間的にはあぶれ者であり、腕っぷし自慢の荒っぽい連中が集まっている。盗賊の類と大差ない輩も多い。グラシェスが過去どの程度の悪事に手を染めて来たか、ここで詳らかにはしないが、当然ながら彼自身にやくざ者との自覚はあった。堅気衆に蛇蝎のごとく嫌悪されることにも慣れている。高みから悪口雑言浴びせられようと、いまさら痛くもかゆくもない。
「まあそう気色ばむな、じいさん。さすがの俺にも、こいつは蹴破れねえさ」
言いざま靴先で扉を蹴ると、全面に緑青の浮いた厚い青銅板が余韻のない音をたてる。
「何をするか、不埒者め！」
「だからよ。俺がなにしようがこのとおり、びくともしやしねえんだから、ぎゃあぎゃあ喚くなよ」
「そうそう、年寄りはあんま興奮しねえほうがいいぜ」
「卒中でも起こしてぶっ倒れちまったら、どうなるんだ」
「そりゃ腐るにまかせるしかねえわなあ」
「ここは窓もほとんどねえし、あってもちっせえもんな」
「お偉い先生様なんだから、迷惑な死に方はしちゃいけねえぜ」

グラシェスに付き従ってきた手下共が、好き放題の言いたい放題に口をはさみ出すと、もうアスナンの手には負えない。
「グラシェス、お前なんの用なんだ」
「あ？　じじいにゃ用はねえよ。お前がひょこひょこ広場を横切ってくのが見えたからよ」
「だったらあとにしろ。とにかくあいつら連れて、ここから離れてくれ」
「まだあの、おありがたい説教を聞きたいのか」
そうではないと手荷物を指し示す。グラシェスの納得顔に本来の用件を済ませるべく小窓を見上げれば、憤怒に血走った金壺眼が消えていた。大扉の中ほどにある窓の位置は高く、到底ひとの手では枠に届かぬくらいだから館長は梯子を使っているに違いない。よもや怒りのあまり卒倒して転げ落ちたのではと、アスナンは窓の真下から呼びかけた。
「落ちつけよ、船乗りの。落っこちてりゃあ、それらしい物音がすらぁな」
例の古顔がうながすように仲間を見まわせば、九人の男達はみな首を横に振った。だれも不審な音は聞いていない。どうやら転倒の可能性はないようだ。窓が開けっ放しなのは几帳面な老館長らしくないが、いずれ戻ってくるという意思表示だろうか。
アスナンは扉にもたれかかり、図書館長の機嫌がなおるのを待つしかないと覚悟を決めた。だがグラシェス達に居座られては、永遠に待ちぼうけとなるだろう。早くこの場を去れと追い立てる。
「せっかく良い酒が手に入ったってのによ」
グラシェスが率いる探索隊の生き残り三十数名は、当初の目的を果たすために活動している。すなわち女王救出と、異変の原因究明である。そのために王宮の調査を続けており、副次的に食料などの物資を見つけては運び出していた。そして本日の収穫に、封切り前の酒が数本ふくまれていたのだった。
「久しぶりに差しで一杯どうかと思ってな」

口もとにやった手で、ぐい呑みを傾ける仕種をして見せるグラシェスに、アスナンがなんの魂胆だと肩をすくめる。魂胆なんぞあるものかと笑うその顔は、如何にも腹に一物を仕込んでいそうだったが、この男があからさまに人の悪さをひけらかすときは、反対になにも企んでいなかったりする。

これだから憎めない。

手提げ籠を押しつけてきたラスティオの目を思い出し、あの不甲斐なさを振り切りたくて動かぬ空を見上げた。そしてふと、図書館長の無遠慮さに救われているのだと気づく。グラシェスの意味不明な言動にも、おそらくは。

「今夜中にカタがついたら寄れよ」

肯きかけたアスナンを留めたのは、かすかな匂いだった。次いで木の軋む音が聞こえたように思った。

「これでも食らえ、下郎共めが！」

高らかに宣言する老館長の声と同時に頭上から、どろりとした液体状のものが降り注がれた。一瞬熱いと感じたが火傷を負うほどに熱されてはおらず、何よりその臭気に他のことなどどうでもよくなった。

「うわ、なんだこりゃ」

「くっせえ！」

不快な匂いだが刺すような強烈さはなく、明らかに腐敗臭とは違う。

「けだもの畜生に似合いだわい」

見上げた先、覗き窓から突き出された行平が踊っていた。勝ち誇ったその言どおり、獣くさいといえば妥当だろうか。

「こいつは煮皮だな」

「にかわっすね」

グラシェスと古顔の手下がまじめくさった顔つきで断定しつつ、自らの鼻をつまんで、汚染された面々から目を逸らす。手下のほうはともかく、もっとも被害甚大のアスナンの目前にいたはずのグラ

シェスが、まったくの無傷であった。
「なんてことするんだ、じいさん」
「む。なんじゃ、おぬし。まともに浴びおったのか、鈍いのぉ」
おなじく頭部から顔面に被害を負った手下が二人ばかり、迂闊にも泉の水で洗い流そうとして悲鳴をあげている。にかわの性質は高温に溶け低温で固まる。水では落とせないのだ。その様子を眺めやって、図書館長は愚か者めと呟いた。
「慌てずとも毒ではない。よしんば口に入っても死にはせんから安心せい」
「そうかい、そいつはよかった。残さず食ってくれ」
異臭に耐えながら、手提げ籠を差し上げた。楕円形の籠に取っ手がついただけで蓋はない。中にはラスティオが老父のために作った夕食が、皿ごと収められ布巾がかぶせてある。白い布巾は薄茶色に染まっていた。

〈四〉森の色、海の色

雲は不動のかまえで居座り、無風の大気は湿気て重い。通常のシェルナムでは数日で雨季にとってかわられ、一年後に再び巡ってくるまで人々に忘れ去られるような、当たり前にあってしかも重要ではない単なる過渡期間の空模様であった。それが日常になっている。そしてこの閉鎖空間での不自然な日々が、本来なら決して出会わなかった人と人を繋いだ。

背中をあずける大扉の、堅く冷たい感触には曖昧さが一切なく、アスナンに奇妙な安堵をもたらした。同時にこの確たる実感よりも、鮮烈さを奪われた眼前の風景こそ記憶にこびりつくだろう予感に、かすかな憤りをしか覚えない自身がみじめだった。

慣れていくのではない。馴らされているのだ。

「まだ居ったのか」

「こいつを図書館長殿に手渡すまでが俺の仕事なんでね」

その視界に入るよう、手さげ籠を持った腕を前方に突き出す。

覗き窓からは大扉にもたれかかるアスナンの、地面に投げ出された左足が辛うじて見えた。異臭はほとんど消えている。

図書館長がぶちまけた膠(にかわ)は、書籍修繕のためのもので接着力は弱かった。頭髪や衣服にこびり付いた、ゆで卵の白身のように弾力のある薄茶色のかたまりを、大雑把にこそぎ落として洗い流したあと、アスナンはかの老人が再びそこから顔を覗かせるのを待っていたのだった。そうしてグラシェス達が去り、泉にたむろしていた連中も次々と引き上げ広場が空っぽになってようやく、しわがれた声が頭上から落ちてきた。

膠まみれになった籠を見るや、老館長が無言で覗き窓を閉ざしてしまったので、アスナンにはとんだ居残りとあいなった。間もなく八の鐘が灰色の空に響きわたるだろう。だが予想していたよりもずっと早く戻ってきたので、口では少々嫌味めいたことをいいながら

も、その顔は穏やかに笑っている。
　エルナ・デュガーレは商業都市として発達してきた。高い城壁を巡らせ堅牢な門を築いて砦としての体裁を保っているが、たとえば食料自給率は極めて低く、大神殿の敷地内にわずかばかりの農地があるにすぎない。戦乱の少ない「名を秘したる女神の島」では、長期間にわたる籠城のそなえなど不必要であり、備蓄されている糧食は災害や疫病の発生を想定してのことだった。皮肉にも極端な人口の激減によって、食料対策は焦眉の急ではない。しかし外部からの補充が望めない今、王都内の物資が減少の一途なのもまた事実だった。
「とにかく受けとってくれないか。そうすりゃ俺は責任を果たせる」
　いくらも待たず鉤が青銅の扉にこすれる聞き慣れた音がして、アスナンはそれに誘われるように立ち上がった。下りてくる鈍色の金具を手にとり籠をかける。
「いつまで、こんなことを」
　遠ざかる籠を目で追いながら、広場へとおりる石段の手前まで後ずさった。窓を見上げるに、そのくらいの距離がちょうどよい。図書館長は引き上げた夕食の惨状に渋面をつくっていた。
「いつまで、と言ったな」
　咳払いをひとつ、ぎょろりと例の金壺眼がアスナンをとらえる。
「私は私の職分を全うするだけだ。いつまでと言うが、可能な限りと答えるしかない。さきほどあの破落戸（ごろつき）共めが腐るにまかすなどというておったが、このまま命が尽きればそうなるであろうの」
「後悔、しないのか」
　後悔という言葉に、老館長は目をすがめる。
「若いうちは悔いることばかりか」
「若い？」
　老境は遥か遠いが、若造あつかいされる年でもなかった。故郷を飛び出して既に一七年がたつ。そのあいだに彼は念願の交易船へ乗って、四度の南方行路を経験した。そして遠い故郷をときに思い返

しつつ一度も帰ることのないまま、半年前に父の死を報された。
北部の小さな漁村に生まれ育ったアスナンは、父と同じく漁師として一生を終えるはずだった。別の人生などあり得ない、そういう村だった。そういう父だった。
「私を見よ。この老骨、いつ召されたとて不思議ではない。悔いてる暇なぞないのじゃよ」
なるほど確かに、アスナンにはまだ悔いる余裕がある。父のことを。失くした女のことを。そして故郷へ帰ると決めておきながら王都へ立ち寄った挙げ句、そのままぐずぐずと踏ん切りをつけられなかったがために現状を招いたことを。だがこの移ろわぬ世界では老いも若きも、同じ線上に立っている。静止の均衡が崩れて時が流れをとりもどせば良いが、悪くすれば王都もろとも消滅することになるだろう。それとも閉ざされた永遠の中でいずれ緩慢な死を迎えるかだ。
大鐘楼の鐘が八の時を告げる。さざなみのように押し寄せるその音色の清澄なること、かつては巷間に魔を祓(はら)うと信じられていた。鳴りひびいた鐘の音が契機となって「暴の三日」が終息したのは確かで、その迷信もあながち的外れではないかもしれない。少なくともあのときのアスナンはそれに一縷の望みを賭けて、くすぶる煙と腐敗臭に満ちた通りをひた走ったのだ。
もうそんな刻限かとひとりごちた図書館長は、はね上げている覗き窓の扉へ手をかける。それは時刻よりも腹の虫に催促されてのことだった。
「今日は世話をかけた」
これまで別れ際にひとこと「御苦労」と、大上段から振り下ろすだけだった図書館長が、謝意など述べたりしたものだからアスナンは目を丸くした。その反応が不快だったのか、初めて見せた温厚篤実な人士の表情は即座に引っこめられた。ただし肉の薄い皺顔からは、あのとげとげしさはすっかり失せている。
「では、また明日」

そう言って閉じられた窓をしばし茫然と見上げていたアスナンは、思い出したように頭に手をやる。洗い流し損ねた接着剤で、短く刈った髪はごわごわと強張っていた。ねぐらに帰ってなんとか薪を調達し、湯を沸かして服と身体を洗わねばならない。グラシェスの誘いは反故にしようと決めて、ある学士の半生に背を向ける。

馴らされているのだとしても悪くはない。

たわいない会話であった。結論のない問答だった。それでも交わしたことにこそ意義があったのだろう。石段をおりたところで、味も素っ気もない漆喰の白壁と緑青におおわれた大扉へ声に出さず「また明日」と告げてみる。浮き足立つほどではないにしろ、うつむき加減の顔をまっすぐ上げてみようという気にはなる。

今日は昨日にとっての明日であり、明日にとっての昨日となる。しかし名は変われど何ら変化のない日々は、単に消化される無為の今日が連続しているだけなのだと、この半月を投げやりに過ごしてきた。そんなアスナンにとって、さんざんな目にあいながらも「今日」は、少しだけいつもと違う一日だった。

このどこかしら緩んだ気分を抱えたままで帰路につこうと広場を横切り、東大路へと足を向けたアスナンは精霊像をゆき過ぎたところで前方に人影をひとつ見出した。東の泉の受け皿ともいうべき御影石の、円状の縁に片膝をついて身を乗り出し、まん中の湧出口から溢れる水に顔をつっこんでいる。肩にはね上げた陽おおい付きのマントの裾が、甲斐なく下方の溜まりに浸かっていた。

その出で立ちは標準的な旅装だ。ただ王都ではよけねばならぬ陽射しや風雨は絶えて久しく、防寒の必要もない。雨季を目前に控えたままで、むしろ蒸すくらいである。

くだんの人物が視線に気づいたのか、おもむろに顔を上げた。警戒も露わなまなざしに足が止まる。いつの間にか、張り上げずとも声のとどく距離まで近づいていた。あと数歩で間合いに入る。入れば躊躇なく剣を抜き打つ目であった。

「そう睨まないでくれ。足音をしのばせて近づいたわけじゃない」

男はアスナンの足下と腰にさげた剣を目線だけで確認すると、顔を拭いもせず身を起こした。正面から相対し、よくよく見ればずいぶんと若い。頬から顎にかけてのやわらかな線に少年の名残がうかがえた。だが何より目をひいたのは、左右色の違う瞳だ。左は陽光に透けるみずみずしい新緑を、右は快晴の空のもと無限に広がる洋上の海を思わせる。一度見たらまず忘れない容貌だった。

「外から？」

まさかの思いがそのまま口をついて出る。見覚えのない男の全身は細かい砂にまみれていた。エルナ・デュガーレ周辺を含むシェルナム内陸部は、四王国の中でも有数の乾燥地帯である。真夏の陽射しは雲に遮られはしないが、ゆるい風に舞い上がった砂埃がいつまでも滞空して黄色く陰るといわれるほどだった。雨季を迎えぬままの王都にとって、その男は未来からやって来たかのようだ。

探索隊百名の消息が途絶えたあとも、情報が混乱していたのか、たびたび少人数の流入があった。しかしさすがに、ただの一人も生還する者がないまま二月が過ぎるとぱたりと止んだ。実に一月ぶりの新たな来訪者である。

「あんただけなのか」

曖昧に肯きつつ、男は落ち着かないふうに問う。質問の意図が分かりかねて、アスナンは眉根を寄せた。

「ここに辿りつくまで人っ子ひとり見かけなかった。生存者はほかにいないのか」

流入者は例外なく東側から入城する。なぜなら現在通行可能なのは、東の大門である晨明門だけだからだ。この若者もかの門をくぐり、大路を進んできたはずで、急ぎ足でもゆうに一時間はかかる道すがら、誰にも会わなかったのではその不安も察せられた。

「いや、いるよ。たぶん千人くらいだと思うが」

「千人。たった、の」

「正確な数字は俺もよく知らない。知りたければ商工会が把握してるだろうから、そっちで尋くといい」

色の違うまなざしがぼんやりと周囲を見わたす。男は明らかに戸惑っている。晨明門の内側の、市街地との間に広がる空き地は仮の墓所となっていて、見わたす限り墓碑のかわりにと盛り上げられた土の小山に埋めつくされていた。東大路をすすめば、両脇に居並ぶ建物の無惨な破壊の痕がいやでも目に入る。それらを眺めつつ無人の通りを一人来て、ようやく会えた人間に告げられた実情をどう受け止めればいいのだろう。

アスナンの助言に男は、そこまでする必要はないとどうにか答えた。戸惑いは戸惑いのまま、それでも何かの覚悟を胸にこの得体の知れぬ地へと踏み入ったのである。さすがにみっともなく取り乱したりはしなかった。むしろ続く男の言に、アスナンのほうが内心うろたえた。

「ひきとめて悪かった。ありがとう」

互いを認識した瞬間に男が見せた視線と、さらりと表された感謝の言葉には、アスナンにとってはなはだしい隔たりがあった。奇妙な違和感である。

その内心を知られぬよう、どういたしましてと気さくに返して数歩ののち、違和感の正体は王都での日々に馴らされたせいだと思い直す。最後にありがとうと言われたのは、もう半月以上も前だ。そして言った女は、既に亡い。

到着したばかりで、浴びるように水を飲んでいた。渇き、空腹、疲労、そのどれもがあの若者の身を苛んでいることだろう。そしてこの時間にまだ食事ができる店を、アスナンは近場に一軒知っていた。

〈五〉森の民

王都には三つの大門がある。南の干城門はいわば表門で、国事にかかわる用件を帯びた者にのみ開かれる。対して東の晨明門は旅行者や小売商ら一般市民のための門であり、西の春宵門は交易施設へと通じている。

シェルナム王国にとって、交易はもっとも重要な国家事業である。その施設ともなれば当然それ相当の規模であったが、いまや支柱と屋根だけの車庫にはわずか数台の荷車が見えるのみ、空っぽの厩舎のかたわらに秣束（まぐさ）がほどかれることなく積まれている。港町さながらの倉庫群や市街地側の塀にそって並ぶ事業所・会館も、ただただ寂々（ひっそり）と静まりかえっていた。

破壊の痕はない。驚くほどに整然としてほつれ一つない風景はだが、鮮烈さを欠いた色彩や、おぼろな影ににじんだ輪郭が古い絵画のようだった。

この調和を乱す異分子もまた存在する。彼らは、いうなれば楔（くさび）だ。冥の災害を因とするなら、果としてハーシュラン王朝の終焉と四王国の誕生がある。彼らはこの死と生をつなぐ楔なのである。八百年の長きにわたって午睡をむさぼり肥え太ったハーシュランの末裔らが、表向きその有り様を改竄したとしても、決して消し去ることはできない。

シェルナム王国に降りかかった凶事が、安寧の底に突き刺さる細微な棘をあらわにする。夜が失われ陰影はあるかなしか。闇を領分とする彼らは身をひそめる手だてを奪われて、否応なく明るみに引きずり出された。

無防備な互いを見いだした瞬間に火花が散った。鳴りひびいた鋼のぶつかる音に、古ぼけた風景画は風景画であることをやめる。命と命が出会い頭に死線上で斬りむすび、一歩もゆずらず渡り合う。

戦槍斧（せんそうふ）の撃ちこみは、まさに疾風迅雷であった。まばたき一つが

死を招く。まともに受けては動きを封じられようと、躱(かわ)し往なせばそれだけに追われ、更には手にした銀の錫杖を地に立てて高みの見物とばかり、仁王立ちに眺めるもう一人に気を散らされる。攻勢に転じる機を見出せぬ焦慮が散漫を、散漫が隙を生んだ。その隙へと斬りかかる一撃に、ダナイは身体ごと後方へ押しやられる。

「月弓刃とはな」

立ちこめる砂煙の向こう、どこか楽しげな呟きに続いて思いのほか若い声が詰問調に問う。

「やはり同族か。このような所で何をしておる」

「同族」の言葉に、ダナイの胸中を苦い亀裂が走り甘い血がしたたった。義兄の叛逆を“谷”に断ぜられてより以来二十年、初めて同族に同族と認められた。確たる叛意に導かれし地にて。だが皮肉に皮肉を重ねたこの現実、この不条理ですら、至極当たり前に“谷”の戦士である二人の男達への嫉妬を嘲弄にすり替えることはできなかった。

「答えぬか」

「よかろう。ならば」

しゃらん、とすずやかな鐶(かん)の音を合図に、ふたつの影がゆらり揺れた。殺気という名の猛毒を塗布せし得物が同時に突く。砂のとばりを薙ぎ、斬り上げ打ち下ろす。一刀にて応戦していたダナイは、その猛攻にもう一振りの鞘を払った。青白い刀身にくわえて対なる漆黒が、縦横自在の鋒(きっさき)を石突を辛うじて防ぐ。二人が一人でも手に負えるかどうかの手練れであった。一度に相手とするは無謀と、錫杖の男の巨躯を利して戦槍斧の死角へ没する。

突き入る銀の長柄に刀身を添わせてたったの二歩、されど二歩の間合いを帳消しにする。鎬(しのぎ)を削りひるがえし、返す刃がとどくより先に腿のあたりを熱線が走った。半端な振りは半端に肉を裂き、死角の縁より閃いた戦槍斧もまたダナイに浅傷を負わせるだけに終わる。だがもとより不利な者に後退を余儀なくさせたなら、この局面での勝者はいうに及ばず。さらには退けば押すが定石と、容易に退

かせてはくれぬ。
踏みとどまるな。
肉体感覚が思考を凌駕する。四肢が脳をねじ伏せる。漆黒と青銀の交差が、穿ち貫く錫杖を阻んだ。
衝撃がすさまじい圧力となってダナイをはじき飛ばす。その身は地に引きずられ転がり、ようやく事業所の外壁にうけとめられるまで砂塵の筋を延々とひいた。
砂にまみれた墨染めの衣服に、本来ならば目立たない血の赤が広がってゆく。受け身すらとれずにさらした無様を恥じる暇(いとま)はない。立ち上がる。全身あちこちから悲鳴があがったが、まだ立ち上がれたし歩けもした。では走れるか。戦えるか。ダナイは素早く背後を確認する。事業所の入り口は建物中央に一カ所だけで、しかもしっかり施錠されている。市街地のように破られている窓もない。ただしなぜか鎧戸の設置は一階のみで、上階では午後の西日を取り入れよとむき出しにされた硝子戸が、仕方なしにあいにくの空模様を映している。
「まさかあの兄者に手傷を負わせるほどの者と出会おうとはな」
隆(りゅう)とした筋肉は男をひとまわりもふたまわりも大きく見せた。そこにいるだけで他者を威圧する体躯であった。しかしその声は意外にも少年めいている。
「見ぬ顔だが外れ者か。名を聞いておこう」
答えのかわりに、ただ男の目を見る。些細な苦痛に続いて、切り裂かれた右腿の傷のことも頭から消えた。そうして押し黙ったままのダナイに、男はさもありなんと得物を両手に持ちなおす。
なぜか錫杖の男は後方にとどまっている。傷は浅いはずで、事実その顔色に何ら異常は見られない。これは好機なのか。ダナイはその予断を即座にふり払った。対峙する敵が一人でも依然、劣勢は劣勢のままだ。しかも長丁場になればなっただけ形勢は悪化する。一対一で仕合えるならば願ったり叶ったりとダナイのほうから仕掛けた。真正面からの無謀無策とも思える挙にかえって意表を突かれた

か、戦槍斧の男がはじめて防戦一方を強いられる。一瞬の間に数合をかさね、押し切れず押し返し切れずのつばぜり合いの末、どちらからともなく再び間合いのそとへ跳び退る。

「そうでなくてはな」

喜色を浮かべて戦槍斧の男が咆えた。

互いの位置が入れ替わっていた。前後から挟撃されればひとたまりもないが、錫杖の男はやはり動くつもりがないらしく、戦槍斧のほうも相棒をあてにしていない。

袈裟懸けに斬りおろされた斧刃がうなりを上げる。退いて避け、避けきれず鋒が腕をかすめた。かすり傷なら上出来と誘うように踏みこめば、誘いと知っていて打ちかかる。

転機はすぐにやってきた。その刺突は足の負傷を狙ったものだったのか。しかし鋒は空を突き刺し、柄の上にダナイをのせて静止したかに見えた。地面に叩きつけられた過負荷に穂先がへし折れる。踏み出した一歩で半ばまで、咄嗟に愛器を手放して身がまえる男に先んじて次の一歩でその肩を蹴った。血の赤が軌跡を描く。

事業所二階の窓に鎧戸はなく、おまけに南端の角部屋には飾りのような狭い露台がはり出していた。跳躍の方向はよかったが距離感に多少の齟齬があり、手すりを越えるに足りずすがるように取りついて落下をまぬがれる。地上からの罵声に押し上げられてなんとか這い上がった。

ちょうど張り出しの真下あたりにいるのだろうか、声はすれど戦槍斧の男の姿がない。もう一人の敵、あれから一歩も動いていないとおぼしき錫杖の男と目が合う。怒り狂った相棒とは裏腹に、感情の起伏のない双眸が真っ直ぐ見上げていた。

〈六〉ヒシュカとイズルー

激憤にまかせて刃を叩きつけたところで、耳をふさぎたくなる音をたてて鎧戸にかき疵を残すがせいぜいであった。そんな無駄でもやらかさねば、持てあました衝動のやり場がない。戦いのなかで久々におぼえた沸きたつような高揚を、最悪のかたちで文字どおり踏みにじられたのだ。

上階へと遁走した男の意図は明白である。もはや事業所の裏手から塀をこえて市街地へ逃げおおせただろう。

「やめよ、イズルー」

鋒(きっさき)を欠いて大斧に格下げされた感のある戦槍斧がおもむろに、制止する声へ向けられた。激情に濁った目が睨めつける。

「まだ遊びたりぬか」

「なにゆえ手をひいたか、兄者よ」

イズルーと呼ばれる男、その武は兄と慕い師とあおぐ錫杖の男ヒシュカをもしのぐ。だが盛んなる血気を飼い慣らすまでには至らず、こうしてたびたび生来の短気に流される。

「汝(うぬ)の悪い癖ぞ。頭を冷やせ」

忠告の返答は手加減の微塵もない一撃だった。銀の錫杖(しゃくじょう)がなんなく受けとめる。怒りにまかせた振りは先刻までとは打ってかわって鈍い。いかに唐突であろうとヒシュカにとって、小虫をはらう程度の煩わしさである。しかしとどめた刃がなおも力押しに押してつめ寄るとなると話は別だ。

「なるほど己(おれ)は冷静ではない。したが兄者はどうだ。あの者を逃すどのような理由(わけ)がある」

「彼奴めが剣の主に放たれし刺客と決まったわけではない」

「決まったわけではない？　それがなんだ。まさか無益な殺生はせぬなどと言うつもりではあるまいな」

ヒシュカの非情はときに戦士の間でも忌諱されるほどだった。人

まちがいを懸念して、攻めの手をゆるめたなどと到底ありえない。ましてやあの墨染めの衣服に身を包んだ男は、遠見（とおみ）と先見（さきみ）の巫女が告げた刺客に合致した。すわなち「同族」「男」「黒」そして「月」である。

四王国の前身、ハーシュラン王朝は渡来の民により立国された。それ以前は「名を秘したる女神の島」に国という概念はなく、七つの氏族と信仰を司る“谷”に支配されていた。ふたつの異文化が出会えば融合と反発がおこる。当初はゆるく穏やかな交流が消極的に行われたが、渡来人の勢力が増すにしたがって両者に摩擦が生じた。いずれ大規模な争いへ発展すると思われたが、そこに人の営みを凌駕する事象が起こる。冥の災害である。この災害によってより打撃をうけたのは先住民で、人口を大きく減少させた彼らは島の中央部にひろがる樹海に隠れ、冥を鎮めし英雄王ザハナクの遺児らが生きのこった民衆に推戴されて四王国時代が幕をあける。

樹海を住処としてのちは「森の民」とも称されるようになった先住民は、こうして歴史の表舞台から姿を消した。いまや建国の伝承にのみその影をのこす彼らは、王国人の一般的な認識ではまぼろしの民であり過去の亡霊であった。しかし人々に忘れ去られようとも、その存在が煙のように消えてなくなるわけではない。彼らは生きていた。むせかえる緑に支配された、深淵の闇をたたえる森の奥で生命を繋いできた。

「あの月弓刃を見て気づかなんだか」

錫杖と斧刃の交差ごしにヒシュカの声がひそめられる。そうさせたのは他者の耳目をはばかってではない、ある種の禁忌感ゆえだった。

「あれはまさしく虧月（きげつ）と盈月（えいげつ）。汝もその名を耳にしたことがあろう」

「月の沢の反乱か。因縁があったのか」

睨み上げるまなざしがふと揺らぐ。

虧月・盈月とは月の沢という小さな集落に伝わる月弓刃である。打ち出されてより数百年の古刀は、その姿や切れ味に衰えのない名

刀でもあった。
　しかしまずはイズルーの言う「反乱」について語らねばなるまい。二十数年前に起こったその事件は、月の沢の若い戦士が、一人の巫女を連れ去り行方をくらませたことに端を発する。そしてこの若者の所業をうけて、“谷”は月の沢に叛意ありという烙印をおした。
　因縁かとつぶやいて、珍しくヒシュカが言い淀んだ。この事件に関わった者、特に戦士達の口は一様に重い。“谷”は総力をあげて逆賊を捕らえよとの命を兵部にくだし、およそ百人が追っ手としてさし向けられた。たった一人に百人がかりとは、その後味の悪さは想像に難くない。ましてや相手は同族の、戦士として少年のころより切磋琢磨してきた朋友なのだ。
　イズルーの亡き父とヒシュカは、ともにこの百人に名を連ねていた。
　いつの間にか互いの武器は押しあうことを忘れている。何事にも動じることなく迷いなく、常に淡々と務めを果たしてきた相棒のらしからぬ様子に、イズルーはすっかり毒気を抜かれてしまった。そうして冷静さを取りもどせば、怒りを抑えきれずに打ちかかった失態が思いおこされて、気まずさにおずおずと戦槍斧をひっこめる。
「先程の男が月の沢ゆかりの者と、兄者はそう思うておるのだな。だが虧月盈月は失われたのではなかったのか。親父にはそう聞いたぞ」
「汝の父はそう言うたか。そうであろうな」
　折られた鋒を拾い上げようとしていたイズルーの手がとまる。妙にもったいぶった言い回しだった。
　この事件の顛末、すでに「顛」は語った。それでは「末」はどうなったのか。つれ去られた巫女の行方は杳としてしれず、数十人の傍輩と死闘を演じた若き戦士は崖下へ転落し増水した川にのまれた。その手にあった虧月盈月はもちろん遺骸すらも回収されず終いである。そして「外れ」とされた月の沢はなんと、二十年経ったいまもその処遇が解かれぬままだった。

しかしてここには不都合な事実の隠蔽と、せめてもの情けによる方便が混在している。連れ去られたとされている巫女はその実みずから出奔したのであり、反逆者として葬られた若者が最期のときに所持していたのは虧月・盈月ではなく鋼鉄製の月弓刃だった。

「どういうことだ」

「さてな。ともかくその男もろとも川に流されたのは虧月と盈月ではない。これだけは確かだ」

多くの謎がいまも謎のまま、誰もが口を閉ざして語ろうとしない。一人の男と一人の女が恋に落ち、手に手をとって因習としがらみから逃げ出した。だが振り切ろうとした因習としがらみを、男は最後の最後で振り切れなかった。この事件は本来ただそれだけのものであるのに。

やはりあなたには敵わないな。

息も絶えだえに、それでも膝を屈さず血ぬれた口もとをかすかに微笑ませて、男はヒシュカを見上げた。親しい間柄ではなかった。言葉を交わすよりも武を交わし、わずかばかり先行した白星を誇る気もなく余裕もなく、その存在を意識し続けていた。互角に打ち合える、数少ない一人だった。

大鐘楼の鐘が二人を現実に引き戻す。それは鳴りおさめの鐘。一日は九の鐘でしめくくられ、明けて四の鐘より始まる。

透きとおったその音色が呼び水となったわけでもなかろうが、イズルーの腹の虫が思い出したように騒ぎはじめた。

「そういえば気どり屋の隊長殿が、どこぞへ来いとかいうておらなんだか」

怒気は霧散し考えるのにも飽いたのか、イズルーの頭から黒衣の男や二十年前の事件についてのあれこれは追い出されてしまった。もとより楽しいとはいい難い話題である。切り上げられてもヒシュカには何の不都合もない。

「今からでは大幅に刻限を過ぎような」

「めんどうじゃ。大体あのしたり顔を前にしては、何を食っても不

味かろうぞ」
不平をもらしながら鋒を失った戦槍斧を肩にかつぎ、市街地へと続く門内門へ向かってすたすた行ってしまう。相棒の意向など伺いもしない。
外部との連絡を遮断されるというこの不測の事態に、彼らは生きのびるため武を売った。その判断には是非もないが心情的に納得がゆかぬイズルーは、現在の雇い主を悪し様に言うことで鬱憤を晴らしている。どこかしら幼稚なところのある男だった。
その背を追って数歩も行かぬうち、ヒシュカは後ろ髪を引をかれるようにふり返る。交易事業所の二階南端の窓が開け放たれている。黄みがかった壁面に点々と落ちる小さな赤いしみは、たった数歩でもう見えなくなっていた。
黒衣の男が月の沢ゆかりの者であろうこと、十中八九まちがいない。彼は虧月・盈月の真価を知っているだろうか。人の業(わざ)を超えたあの禍々しさを。
遠くで呼ばわる少年のような声に催促されて錫杖を一薙ぎ、爽涼とした鐶(かん)の音色で自身をとらえる諸々をひとまず断ち切った。その顎から口の端にかけての古傷がひきつれる。
一度としてあの男は本気ではなかった。
決して人にふるってはならぬ。それがあの凄まじき双刀、虧月と盈月を授けられし者に科せられる誓いであり、彼は頑なにそれを守った。だからこそヒシュカは今も生きている。
ありがたくもない。
ひきつれが疼きを伴った。

〈七〉ミーザム街1

地上に降り立ったダナイは、そこで初めて濃密な気配に気づいた。がらんどうのような交易施設との落差には息苦しさをも感じる。ざわめきとも違う、何と特定できない気配がこの無風の大気にわだかまっていた。壁一枚の隔たりは想像以上のものを遮断していたようだ。

かつて貴族街として華やかで権高な風をこれ見よがしにまき散らしていた南西地区ミーザム街は、生への執着と諦念が入り混じった、どこかせっぱ詰まった喧噪に夜ごと包まれている。そんな刹那的ならんちき騒ぎとは裏腹に、ここは王都でもっとも安全な街区だ。すべての建物は南方人達に管理されていて、居住するには彼らの許可という選別を受ける。さらに出入り口は南大路へと続く橋が一つきり。厄介な場所であった。

なじみの女の一人でもつくっておくべきだったか。

その身勝手な思いつきに、ダナイは吐き気すらおぼえる。できもしないことをと自嘲に顔をゆがめた。偽りの好意を演じられるなら、もっと楽な生き方ができただろう。少なくともこうして人殺しなんぞに身を堕としてはいまい。

行けども行けども白っぽい石畳が続く。ふり返る。逃げ場のない一本道が白く尾を引いていた。明らかに経路の選択を誤ったが、後もどりする余裕もない。このまま進めば半時かからず街区の北端へたどりつけよう。そこから塀と空堀を越えて、隣接するダラッド街へと脱出するつもりだった。

砂まみれであちこち切り裂かれた衣服もさることながら、右足に巻きつけた布がゆっくりと、だが確実に赤く染まってゆく。何より殺し合いの余韻とでも呼べばいいのだろうか、疼くような興奮にいまだ指先がふるえていた。住民たちで組織された自警団は、昼夜を問わず目を光らせている。この出で立ちこの有様では間違いなく怪

しまれる。
額に浮かんだ冷たい汗が、ひと筋ふた筋と流れて視界をにじませた。気配であったものは狂騒へと変じている。見せ物でも打っているのだろうか、蔓草がからまる鉄柵の内側からもれ聞こえてくるのは軽快な音楽だ。鳴り物が拍を刻み、擦弦楽器（フィドル）の情熱的なうねりが歩調にはずみを促している。それに合わせた歌声、手拍子、そしてはやし立てる野卑なかけ声や指笛。
建物の裏手にあたるため、見える範囲に人の出入りはない。そしてこの賑やかしさの向こう、そそり立つ槍の穂先のような鉄柵が途切れた先で、やっと一本道の終わりとなる四つ辻が現れた。ダナイは思わず安堵の吐息をもらす。いつの間にか指の震えは止まっていた。異様な興奮状態が冷めて肉体感覚が正常に戻りつつある。痛みが痛みとして知覚されはじめていた。
鳴り納めの鐘が頭上をとおりすぎて、入れ替わるように近づく者があった。まがり角の向こうから声が聞こえる。ふと、このまま誰かに目撃されたなら、それでいいような気になる。
死んだ者を追ってはならぬ。
エルナ・デュガーレへと旅立つ前夜、養母がダナイに訴えた一言がいまなぜか脳裏によみがえる。三月前のあのときは考えもしなかった。だが「死んだ者」とは誰を指していたのだろう。
妻か。
それとも義兄（あに）か。
痛む足を叱咤して柵を越える。家屋は思ったよりも近くに迫り、裏庭にあたるこの狭い空間を圧迫している。はびこる蔓草と、固い葉を生い茂らせる小高木のあいだに身をひそめた。
「いい加減にして」
不明瞭だった声が突然に意味をもった。女の声だ。どうやら角を曲がってこちらへと向かってきている。
「何度おなじこと言わせるの。あたし達だって食べてかなきゃいけないのよ。それともあんたが食べさせてくれるっていうの？」

「だからよ。俺だって稼ぎの半分お前につぎ込んでんだぜ」
「子供ったって三人もいればあんな端金、あっと言う間に右から左に消えちゃうのよ」
娼婦となじみ客と思われる二人連れであった。立ち止まって二言三言の応酬のあと、数歩すすんでまた向き合う。飽きずにそれをくり返す。早く立ち去れと胸中で毒づきつつ、ダナイは聞きたくもない痴話げんかを聞いていた。ところがそれこそ目と鼻の先で言い争いはますます激しくなる。
最初から分かっていたことだろう。もちろん分かっていた。そんな押し問答が続く。
まずいな。
ダナイの懸念をよそに、案の定ののしり合いがはじまった。鳴り収めの鐘を汐(しお)に楽の音が止んでいた。声高な言い争いを聞きとがめる者があるかもしれない。思った矢先、その懸念は現実となった。ダナイは息をつめる。二階の窓が一つ、音もなくそろりと開いた。
もうたくさんよ、この分からず屋の野暮天。言葉にすれば酷いものだが、女の目にはうっすら涙が光っていた。男はそれに気づかない。掴みかかる。腕をふり上げる。
「やれやれ。犬も食わないってヤツかい」
その声はどこか楽しそうだった。まるで冷やかしているみたいだと、ダナイが思ったほどに。
「それとも助け手がほしいか、ねえさん。なんだったら二三人、そっちへ遣(や)るが」
とつぜんの闖入者にまず反応したのは女だった。見おろす人物は服装や肌の色で南方人と見受けられた。このときまで全く目に入っていなかったのだろう、からまる蔓草が緑の壁のような柵と、ここミーザム街では珍しい素朴な田舎家ふうの家屋に気づいて、あからさまに狼狽える。
「いえ、いいえ大丈夫。なんてこたぁないんですよ、ちょっとしたけんかで。お騒がせしちゃって済みません」

ほら、あんたも謝って。そう促す女の豹変ぶりに、男はいきおいを殺がれたものの矛を収めるには至らなかった。その口調は癇にさわったし、赤の他人の、しかも南方人ごときに指図されるいわれはないとの反発もあった。挑戦的な目つきで肩をそびやかすその袖を、女が血相変えて引っぱる。

ばか、ライサラよ。

ささやき一つが男の強気をくじく。

ライサラ。その名を知らぬ者はない。王都が閉ざされて数日のうちに、南東地区の貧しい南方人を率いてこのミーザム街を占拠した人物である。どさくさに紛れた一種の反乱行為ともとれるこの荒技はしかし、住居を奪われた貴族を除くほぼ全ての住民たちに承認された。承認どころか快哉を叫ぶ声は大きかった。

暗黙の不可侵を貫いてきた四王国において、貴族は王都をとり囲む城壁や城門にひとしい。すなわち無用の長物であり、念のための備えである。しかして王都に降りかかった凶事に、備えは備えとしての役に立たなかった。彼らの大半は右往左往した挙げ句に王宮へ押しかけてそのまま二度と戻らず、あとは使用人に家を乗っ取られほうほうの体で逃げ出したか、逃げおくれて殺されか。邸宅を守ったごく少数の者らも結局は南方人に叩き出されて、現在のミーザム街に貴族はただの一人も住んでいない。

二組の靴音が足早に遠のいて行く。だが辛うじて垣間見える白い服は、窓枠にもたれたまま動こうとしない。それどころか視線を感じる。ライサラの名を聞いたあのとき、わずかに気配を乱してしまった。まさか気取られたのかと右手を腰のうしろ、革鞘に収まった虧月（きげつ）に伸ばす。

「言いにくいんだがな」

とても独り言とは思えない口調に手を止めた。

「見慣れんのがその通りを南からふらふら歩いて来る。それでまあ、ずっとここから見てたのさ」

やり場をなくした手が力なく垂れた。自らの滑稽さに苦笑も出て

こない。まるで子供のかくれんぼのようだ。左の頬がひりりと痛んだ。植え込みの葉は固く、そのまわりは尖ったのこぎり歯のようだった。おそらく葉陰に潜りこんだとき切ったのだろう。このつまらない小さな切り傷には、命のやりとりに身をさらして負った負傷よりも現実感があった。

「そこでひとつ提案だ。こうしてるとかえって目立つ。目立つのはお前さんも困るだろう。俺は俺で、とうとう頭がイカレちまったかと思われると、これまた困るんでな」

やはりどこか不真面目に、だが小さく「今は」とつけ足した呟きには、皮肉めいた真摯さがこもっていた。それはダナイには聞こえなかったし、聞こえたとしてもどうでもいいことだったろう。彼にとって目下の最重要問題は、窓から投げ下ろされた縄梯子をどう解釈するかである。

「ちょいと上がってきてくれないか。どうせその態(なり)でこの時間に、とてもじゃないがこれ以上北へは行けんぞ」

だらりと力をなくしていた腕が、再び背後にまわる。指先に柄がふれた。

「お前さんをどうにかしようってんなら、それこそ一声上げりゃあ済む話だ。違うかい」

柄をにぎりしめる。確かめるように。それだけだった。腕をおろして立ち上がる。「ミーザム街のライサラ」は、話しぶり同様の不真面目そうな笑みを口もとに浮かべていながら、色の薄い瞳にはダナイを値踏みする冷徹さをたたえていた。

〈八〉ミーザム街2

赤茶けた屋根とくすんだ白壁、その壁を補強するよう斜交いに差しわたした木材は、深みを帯びた色合いがかえって素朴な田舎家らしく、煉瓦造りや石積みの重厚な邸宅が並ぶこの街ではかえって目立つ。別邸とはいえ、王の膝元たる都にかまえるのだ。貴族達は競って美々しい豪邸を建てた。そんな虚栄なんぞどこ吹く風の飄々とした佇まいが、いかにも目の前の男にふさわしい。

「なぜ俺を、匿う」

さして広くもない部屋は、予想外に会話が困難だった。ダナイが縄梯子を登り切る前に、階下でふたたび演奏が始まったのだ。しかも彼を招き入れた男は何やら熱心に戸棚を物色中で、生返事を一つ寄こしたきり、無防備な背をさらしてその中を引っかき回している。仕方なく窓辺に立ったまま、男の一挙手一投足を眺めていた。縄梯子はまだ地上へと垂れている。

想像していたよりも若い。それがライサラという男の第一印象だった。ダナイの目には三十を幾つもこえていないように見える。癖の強いぼさぼさの髪はふぞろいで、頬も顎もいかにも不精の結果によるまばらな髭におおわれていた。南方人の常識では「髭を蓄える者は、王か行者」と言うのだそうだが、目の前の男は王の威厳に程遠く行者にしては俗気がありすぎる。

ほどなくして男は目当ての物を探しあてた。黒い革張りの薄べったい箱だった。相当に年季の入った代物らしく角がすり切れ、乾燥に剥落したのだろう点々と白く色抜けしている部分がある。書き物机にそれを置いて、次は壁にかけられた絵皿の一枚へと手を伸ばす。布の切れ端やら定規らしきものがはみ出して、戸棚は閉じられなくなっていた。

人声と楽器はともかく、床を踏みならす音がうるさい。壁伝いに振動をともなうせいか思った以上に響く。絵皿を袖口で拭いながら、

男はやっとダナイをふり返った。苦笑混じりに、こいつが、と親指で床を指す。
「踊り子はからっきしの素人でな。ひどいもんさ。それでも若い女が裳裾からげて踊るってんで、助平共が集まってこの騒ぎだ」
皿は東方渡りの磁器である。男の指が薄緑色の濡れたつやを一撫でし、縁のあたりを軽くはじいた。おそらく硬質の澄んだ音をたてたことだろう。なるほど素朴な外観であっても、この家屋の正当な主は貴族なのだと主張する一品であった。そして男のまなざしは素晴らしい工芸品を愛でるというより、やはり値踏みしている。
「それだけならよかったんだが、警邏の連中にまで贔屓にされちまってなあ」
「警邏」の言葉に、意識の端へと追いやっていた足の痛みがぶり返す。それでも表面上は顔色ひとつ変えない。
先刻、交易施設で出会い頭に斬り合いとなった二人組の男は、ダナイを同族と断定した。それは同時に彼らが、森の民の戦士であるということだ。その誇り高き二人の戦士は、ハーシュラン王朝ゆかりの都エルナ・デュガーレを襲った凶事に巻き込まれ、警邏隊の雇われ兵に身を堕とした。おそらく断腸の思いで甘んじているだろう境遇を、いっそ嘲笑えたならとダナイは思う。
身の丈を越す長柄の武器や鍛え抜かれた体躯など、遠目にも目立つ風体に、もしやとの予感はあった。何と言ってもここエルナ・デュガーレには「剣の巫女」がいる。月の沢の里の現状は「剣の巫女」候補の少女と義兄の駆け落ちが招いた。「剣の巫女」とはそれほどの存在なのだ。“谷”が、護衛の戦士を一人二人つけていてもおかしくはない。それとも。
ダナイの手が無意識に腰のうしろへ伸びる。虧月の柄に触れる。
彼の動向を“谷”が察知していた可能性は果たしてあるか。
遠見と先見の能力を持つ養母は、ダナイがシェルナム王国の都へと赴く理由を知っていた。とうぜん“谷”にも同じ能力に長けた者が幾人かあろう。だとしたら彼らの役目は、「剣の巫女」ではなく

「剣の主人（あるじ）」の護衛だ。それはダナイが彼らにとって、明白な敵であることを意味する。
「警邏隊だ貴族だといっても生身の人間だ。特に若い野郎が多い。どんなにお育ちが良くても、ああいう見せ物は楽しいんだろうよ」
書き物机には様々な物品が広げられていた。例の絵皿には、琥珀色の液体が注がれている。話ながらも男は手を休めず、真鍮製の灯明皿に火を点す。
「こっちにすりゃ煙たいが、まさか警邏隊員様だけを爪はじきにもできんしな」
警戒心のかけらもない背は、まるで旧知の友に対するかのようだった。武装した手負いの、怪しい輩であるはずのダナイを前にして。
この至近距離ならば。
助けを呼ぶどころか悲鳴を上げる暇（いとま）すら与えず、一撃のもと確実に絶命させられる。
「物騒だねえ」
その顔は笑っていた。何とも大らかな、屈託のない笑みであった。
「退屈だったか？　ちょいと回りくどいが、まじめに説明してるつもりなんだがな。お前さんをこうして匿う理由ってやつをさ」
心中の苛立ちを見抜かれて不快さが増す。握りしめた柄を、いつでも抜き放つと言わんばかり押し下げた。
「なあ、にいさん。お前さんは、どっからどう見ても外から来たお人だ。おっと」
男は慌てたように両手を上げて、押しとどめる仕種をして見せた。
「詮索するつもりはない。ただこっちの事情も込み入っててな」
殺気を解く。が、背後にまわした手は下ろさなかった。
不必要に気がたっていた。ひりつく痛みは搏動に合わせて広がり、右足全体に粘質の重みを沈殿させてゆく。冷たい汗がまた一筋、こめかみから頬へと伝い落ちた。
男はふたたび視線を机上へともどした。戸棚から発掘した黒革の箱をとりあげ、掛け金を外しにかかる。

「これ以上、北へは行けないと言ったな？」
最初の問いを聞き流されたわけではなかったらしい。しかしあまりに婉曲な解答に業を煮やし、ダナイは質問をかえた。男は特に異論をとなえず応じる。
「九の鐘はお前さんも聞いたろ。この時間は酔っ払いの帰り客と、そいつらを狙った客引きで橋の周辺は人どおりが増える。おまけに、まあその」
言い淀み、肩をすくめた。
「北辺の境界あたりは、路がせまくて入り組んでるところが多い。身を隠すには好都合だと思ってるのかもしれんが、宿代けちった渋ちん共がそこらじゅうで盛ってる。今のお前さんじゃあ、悪目立ちするだけだ。こっちとしても、警邏の連中がいるときに騒ぎは困る」
なるほど確かにこの街について、表面しか知らないのだとダナイは自覚した。
音楽は相変わらずやかましい。足踏みの音はときどき乱れた。どのような舞踊かダナイには想像もつかないが、短い休息をはさんで二時間近く、早い曲調に合わせて踊り続けている。いや、彼が来るもっと前から見せ物は始まっていたのかもしれない。不揃いな足音は、踊り子達の悲鳴なのだろう。
限界はダナイも同じだった。もたれかかった壁の上を背がすべり落ちる。
「すまん、少し」
休ませてくれ。そう言いかけ、瞬時に苦痛が消し飛んだ。萎えかけた足は踏みとどまり、辛うじて指がかかっていただけの手が虧月（きげつ）の柄を握る。
張りつめた空気のなか、階下からとは別の物音が二人の耳に届いた。それはやや乱暴だったが、家屋全体を揺るがさんばかりの騒音を考慮したせいであって、緊急を要するせっぱ詰まったものではない。
扉が三度、打ち鳴らされた。

廊下へ続く扉は、裏庭を見おろす窓の対面にあった。ダナイは正面を向いたまま、部屋の主の動向をうかがう。窓際の一角を占める書き物机を離れ、部屋の中央あたりで足を止めた男がふり返った。くちびるの前でひとさし指を立てて沈黙を指示し、次いでその手で扉の陰にあたる位置を指す。戸惑うダナイを急かすように、来訪者は声でもって催促をくり返した。

「ライサラさん。いないんですか、ライサラさん」

少年の声だった。ダナイが足音をたてず移動すると、部屋の主は小さく肯いて自らも扉のまえに立った。取っ手に手をかけ、だが肩越しに視線をダナイの左腕へやる。いいのか、とくちびるが動く。刃を突きつけておくべきか否か、そんな逡巡がダナイの脳裏をよぎったのは確かだった。だがそれを男が気づかうのはどう考えても変だ。そして不愉快だった。視線でそう訴えれば、男はかすかに笑う。扉が開かれた。

まず飛びこんで来た一際大きくなった騒音に、ダナイは耳を塞ぎたくなった。慣れているのか男は平然としている。少年の用件もおおよその見当はついているようで、その横顔は落ち着いていた。むしろやや辟易とした色さえ覗えた。

「今日は何を言ってきた」

「あいつら姉さんを！」

若い声が勢いこんで言い、慌てて謝罪する。男はすぐに察したらしい、なだめるように肩でも叩いているのだろうか、少年のほうへと手を伸ばした。

「踊り子は客をとらんと説明したんだな」

「しました。でも」

「わかった」

ほんの二呼吸ほどの沈黙だった。

「この時間だと三番詰め所に黒貂（くろてん）がいるはずだ。奴に事情を話して

来るように言え。山犬には知られるなよ。俺が出て行くより面倒くさいことになるからな」
消え入るような返事に、また男の手が廊下のほうへと伸ばされた。やはりダナイには見えなかったが、どうやら少年の頭を乱暴になでているようだった。
「心配するな。あいつなら巧くやってくれる。どうしても駄目なら俺が出る。俺の店でそういう無理は絶対に通させん。安心しろ」
最初よりは幾分か力強い声が返ってくる。男は肯いて、急げよと少年を見送った。階下の音楽と足踏みに混ざり、遠ざかるかけ足はすぐに判別できなくなった。
不思議なもので扉が閉ざされると、耳は心地良い静寂がおとずれたと錯覚する。ヒトの感覚など相対的であてにならない。ダナイはあらためて思った。だが痛覚は記憶にとどまらない。痛みそのものに慣れてしまう危険を本能が避ける。五感のなかで苦痛は常に新鮮だ。
「やはりライサラか」
もう両の腕はだらりと下ろされていた。壁に寄りかかっている俯いた顔を灰色の瞳が覗きこむ。
「お前さんの名は尋かないでおくよ」
二人は同時に、同じ種類の笑みを浮かべた。
「その足、診よう。肩を貸そうか」
まだ一人で歩ける。ライサラの申し出の一つは辞退した。その後について、書き物机の傍らまで歩く。足は更に重くなっていた。
「適当に座ってくれ」
「あんた、医者だったのか」
机上には治療のための道具が揃えられていた。ダナイは思わず呻く。火を点した灯明皿や清潔な布、酒に満たされた皿、針、糸。例の黒い箱の中には筆記具程度の大きさの、金属製の器具が収められていた。おそらくは切開と摘出のための道具で、使用方法が想像のつかないものも数本ある。

詮索するつもりはないとライサラは言った。それはダナイも同様だが、つい口をついて出た。祖父様がね、とライサラは事もなげに答える。

ライサラに関する噂は数え切れないほどだった。但しどれもがまゆつば物である。もと南方の王族だとか裏社会の黒幕だとか、そう言った分かり易い類だ。どうも彼の前身??この異変以前どこで何をしていたかについて、故意に隠蔽されているふしがある。そんないわく付きの人物だが、こうして本人と話していると、妙に勿体ぶったもの言いに苛立ちはしても胡散臭さは感じない。

自分は医者ではないと否定したライサラだが、とても素人とは思えぬ手際だった。傷口を水で洗い流したあと圧迫止血を施し、焼いた針と酒に浸した糸であっと言う間に縫合した。

身体を横臥えたほうがいいとの勧めには応じなかった。だが足の重みは全身へと広がっていた。汗はひいている。肩に毛布をかけられて、ダナイははじめて微睡んでいたことに気づいた。

思えばライサラはダナイに対して最初からまったく警戒心を示さなかった。むしろ。

「眠れるなら眠ったほうがいい」

そう、むしろ小鼠のように怯えて、歯をむいていたのは自分のほうだったと気づく。そのみっともなさをふり返り、なぜかダナイは安堵に包まれて眠りに落ちた。

〈九〉「兎の尻尾」亭

煤けた支柱がむき出しになっている。焼け残った若草色の屋根にとまる風見鶏は、まちぼうけを食らって所在なげだ。ユリスリートはほぼ瓦礫と化したその家屋を目印として記憶に刻んだ。そうして大路へ視線を戻す。ここまで彼を案内した男の背は、もうずいぶん小さくなっていた。

疑心を差しはさむ余地を埋めてしまうほどに、人なつこい笑顔だった。名前くらい尋いておくべきだったか。

まあいいと、ふたたび歩き出す。逃げ場のない狭い世間である。いずれまた顔を合わせる機会があるだろう。

教えられたとおりに大路から北へ向かい、三つめの小路を東へ抜けると途端に景色が一変した。

静止した街並みは朽ちゆく運命に囚われる。人のための存在は人を失えば滅びるしかないのだ。石の構造物は人の営みが加わって、はじめて町となる。たとえ目に入る人影が武器を携行し険呑な気配をまとう男達ばかりであろうとも、充分にユリスリートを安堵させた。判然としないざわめきと雑多な匂いが混ざり合う湿った空気に、やっと町にいるという実感がわく。

足下には上空の雲に似た、闇にも光りにも属さぬ靄（もや）のような影がまとわりついていた。これではおおまかな時刻すら推測できない。大鐘楼の鐘は入城してすでに二度打ち鳴らされていて、一度目と二度目では回数が違うことから時鐘と断定して差し支えはなさそうだった。しかし午前なのか午後なのか。

時刻などどうでも良いと思う反面、時鐘が打たれればどうしても意識してしまう。それに少なくとも町は、この鐘に従って動いているはずだ。そうして日々の大半は、反復によって消化されてゆく。昨日と同じ今日、今日と同じ明日を持続させることこそが、尊ぶべき平穏なのである。

一人二人とすれ違うたびに、好奇の視線が投げかけられる。だが接触を試みる者はなく、ユリスリートもすすんで誰かと交流を持つつもりはなかった。上滑りに流れゆく視線をやり過ごすうち、さして長くない通りの半分を行きすぎる。ほとんどの店舗は打ち棄てられたように静かだった。目からしみ入り頭蓋の内側にこびりつきそうな異臭漂う薬屋と、開け放した土間に黒光りする大きな甕(かめ)を並べた油屋のほかは、営業している様子がない。時間帯の問題かもしれないが、明らかに長期間にわたって放置されている店もあった。扉が壊されて、中は空っぽになっている。

すれ違った数人の足どりや顔色に、酩酊の色はなかった。ならば午前か。そう思った矢先、朝の商業通りには相応しくない喧噪が起こる。目当ての居酒屋「兎の尻尾」亭は、看板を探すまでもなく見つかった。

その店構えはこぢんまりとしていて可愛らしい。ほぼ真四角に近い入り口の扉は幅広というより縦が短く、ユリスリートくらいの身長ならば辛うじて頭上の心配なく出入りできる高さしかない。けば立った白壁の所々には陶器や硝子の欠片が埋め込まれ、陽射しがあたれば綺羅の輝きをちりばめたかのようだろう。通り沿いに一つある窓ははめ殺しになっているが大きく切られており、店内に明るさを呼び入れていた。

しかしその窓に妙な物がぶら下がっている。毛玉のような塊が五つ六つ、どうやら兎の尻尾部分らしき灰茶色の毛皮であった。また軒先に吊り下がる樫の木を輪切りにした絵のみの看板には、でっぷりとよく肥えた三羽のウサギが描かれている。横一列に並んで往来へ丸い尻を向けている中、右端の一羽だけが振り返っているが、その目はなぜか凶悪だった。

尻尾の毛皮は何かのまじないだろうか、呪術的な雰囲気にくわえて看板のウサギの目が怖い。ここで兎料理を食せば呪われそうな気がした。おまけに三軒先にまで聞こえる騒がしさは、収まるどころか高まってゆく。厭(いや)な予感しかしない。しかし食料品を扱う店は、

ほかに見あたらなかった。手荷物のなかに残る食べ物は干したナツメヤシが二粒だけで、じゅうぶんな備えとは言い難い。深呼吸をひとつ、ユリスリートは腹をくくって扉を押し開けた。

外観からの予想に反して、中は奥行きが深く広い。その広い空間に充溢する異様な熱気が、野太い声とともに塊となって押し寄せた。歓声の中心でにらみ合う二人と、あおり立てる男達がおおよそ三十人。そこここに俄の胴元が出現していて、掲げられる指の本数のみで賭けが成立してゆく。ざっと見わたした限り、通りですれ違った者らと同じく顔色に酒気はなかった。彼らを酔わせているのは、暴力とささやかな小遣い稼ぎへの期待である。

ここは傭兵溜まりか。

気圧されたのは一瞬で、ユリスリートはこの野蛮な風景に懐かしさを覚えた。だが暗黙の一体感に支配された空間へと何食わぬ顔で入りこみ、即座に順応できるような器用さは持ち合わせていない。為す術なくぼんやりと立ちつくしていると、耳障りな金属音の連打が唐突に鳴り響いた。

木杓子を丸底鍋に叩きつける虎髭の巨漢が、間仕切りの向こうから鬼の形相で店内を見わたしていた。興奮は熱病のように男らを冒していたが、鍋と木杓子と巨漢のまなざしは、頭上からぶちまける冷水以上の威力があった。凍りつくような沈黙が訪れると、鍋は殴打の責め苦から解放された。

「この阿呆どもめが。ちっとばかし目を離しゃこれだ」

憎々しげな濁声に、視線を泳がせる者や冷や汗を浮かべる者がある。

「けんかなら外でやれ。皿の一枚でもわりやがったらここにいる全員、二度と俺の飯は食えねえと思えよ」

ここにいる全員というからには、自らも数に入っているのだろうか。ユリスリートはどうにも腑に落ちない気分だが、彼とは別の理由で腑に落ちていない者がほかに二人いた。悪のりと退屈しのぎに騒いでいた連中と違って、この二人は相互に腹を立てており、溜め

にためた鬱憤を今日こそ晴らさねば気が済まないところまで来ていた。何となく気まずくはあったが、まだまだその顔は相手をぶん殴ってやろうという気迫に満ちあふれている。どちらからともなく出入り口へと大股で向かう二人の男に、ユリスリートは道をゆずった。

勢いよく扉が開く。二人の行く手が遮られる。ユリスリートがゆずった場所に、あざやかな緋色が立ちはだかっていた。

「ごきげんよう、諸君」

凛としてよくとおる声は清々しく、造形的に完璧な均衡を保った面白味のない美貌は、その枠を逸脱することなく典雅な微笑を浮かべていた。

つまり、ひどく場違いな男であった。

〈十〉警邏隊長

一斉に注がれた視線は冷たい。招かれざる客である。あきらかに緋色の服の男は、ここ「兎の尻尾」亭では歓迎されていなかった。

ユリスリートはすぐ傍らの横顔を、無遠慮なまでにまじまじと見た。一つに束ねた黒髪は乱れなく、直線と曲線のせめぎ合いの果てに生まれた絶妙な輪郭もまた、乱れを知らぬ神の手によって彫りおこされたかのようだった。口もとの柔らかな笑みは、硬質な光りを宿す瞳の酷薄な印象をかえって強め、線の細い容貌に威厳のようなものを与えている。おそらく貴族だろう。そのまなざしは他者を見おろすことに慣れている。

「相変わらず盛況だね。たいへん結構」

「警邏(けいら)隊長様が直々にこんな場末まで、いったい何のご用ですかい」

虎髭(とらひげ)亭主の声は、あくまで平坦だった。

警邏隊長と聞いて、ユリスリートは耳を疑った。だが店内の誰も、そう呼ばれた本人も異を唱えない。

緋色に黒の折り返しと銀糸の刺繍は、王都警邏隊第三分隊隊長が身にまとうべきで制服であった。おそらくそれが男の本来の身分なのだろう。それがどこをどうしてか現在、警邏隊を束ねる長にあるらしい。この事実一つとっても王都の現状は相当に歪(いびつ)だと言えた。

「そして君も相変わらずだ、ラスティオ君。一国一城を支える気構えは父上譲りか。見習いたいものだな」

へん、と鼻先で笑ったものの、亭主の顔はまんざらでもなさそうである。

「あんたがそれを言うかね。まあいいや。それで御用向きは」

「もちろん食事を」

続きを遮るように、閣下と呼びかける者があった。美貌の警邏隊長の背後から一人、やはり緋色の服に端正ながら特徴のうすい容貌の若者が、素早い身のこなしで店内にすべり込んだ。上官の前方に

無闇と物騒な面つきを並べる二人の男を警戒したのだろう。が、壁の陰に思ってもいない第三の人物？？ユリスリートを見つけてあからさまに動転にする。隊長閣下の真横、しかも剣の間合いどころか即座につかみかかれる距離に、未知の人間を見出したのだから無理もない。そしてその反応にユリスリートはユリスリートでさらに居心地が悪くなる。

「その二人にゃかまわんでくれ。今から殴り合いしようってえ、ただのバカたれ共だ」

店主の言に従ったというより、そもそも興味がなかったのだろう。警邏隊長の水色の瞳はほぼ満席の店内をゆっくりと巡っていて、言葉よりも拳骨で交流を深めるのが流儀の二人を端から一顧だにしていない。彼らのほうでも関わり合いになりたいわけではないのだろうが、こうもきれいに存在を無視されて不快なようだった。舌打ちと何やら呪詛の言葉を吐きかけて店を出て行く。

すぐあとを賭けのにわか胴元らが追うと、つられて我も我もと席を立つ者が続出し、店内はまたたく間に閑散となった。去り際に亭主へ挨拶を投げかける中に、警邏隊員達へ愛想笑いを向ける者も一人二人いたが、圧倒的少数派であるためか卑屈さが際立つ。

「三人さんかね。そっちのしょぼいのは、お連れさんじゃねえよな」

「五人だ。遅れて二人来る」

答えたのは二人目の部下だった。客を一気に放出した扉からもう一人、やはり緋色の衣服の青年が現れる。顔色がやや青ざめていた。

もともと警邏隊長は二人の部下を伴っていた。入り口付近がとつぜん帰り客でごった返したため、ほんの僅かな時間ではあったが上官の姿を見失い、護衛も兼ねている若者は相当に焦ったようだ。そしてこの若者もまた、ユリスリートの存在に怪訝な目を向ける。

確実に警邏隊員二人に顔を覚えられた。おまけに亭主からは「しょぼいの」呼ばわりである。これはやはり出直すべきかとユリスリートが空きっ腹と相談し始めたところで、亭主は思案深げに五人かと呟いた。

「看板だ。悪いな、しょぼい兄ちゃん。今日のぶんは全部捌けちまった。余所あたってくんな」
どこからか含み笑う気配がする。ユリスリートは警邏隊の連中より先に入店していた。そうと気づいていた者には、彼は随分と要領悪く映ったろう。しかし当のユリスリートはそれどころではなかった。嘲笑われたことは気に触ったが、食事は既にあきらめていた。それよりもっと聞き捨てにできない問題が亭主の言葉の中にあった。
「看板」が一日の営業の終了を宣言する意として使用されているなら、今は夜ということになる。
「飯はいい。それより大鐘楼の鐘、あれは何だ」
壁に貼りつけていた背をはがした。仕切り用の卓へ向かって数歩進む。亭主は虎髭の奥で口をへの字に曲げた。
「何って、決まってるだろう。時刻を報せる鐘だ」
こいつは阿呆か。厳つい顔がそう言っている。だがユリスリートはそれに構わず、通りに面した窓を睨むように見た。
既に八の鐘が鳴っている。真夏のシェルナム王国では、午後九時を回ってもまだ薄暗く、十時になってようやく夜のとばりに包まれる。午後八時だと陽が傾き始める時刻だ。但し「外」ならば。雨期の前に逆戻りしたような気候と食い違う日没時間は、看過できない異質さを内包しているように思われた。
夜闇に浮かぶ怪異となった王都の噂は知っていた。噂以前になぜ、あの痩せ馬は王都への道を拒んだのか。ユリスリート自身もまた、落日に染まらぬ城壁を見たではないか。
まさか。
「そうか。君は新たな来訪者なのだな」
教え諭すようなその響きに、ユリスリートの左手がマントの下で握りしめられる。誰かが放った嘲笑よりも神経を逆なでする声だった。
「ようこうそ、王都エルナ・デュガーレへ。君が察したとおり、いまやここは時の流れに取りこぼされた、呪われし地だ」

作り物めいた白皙の肌に、どこか陶然とした高揚が浮かび上がっていた。酷薄そうな目が、ひたとユリスリートを見据えている。つい先刻まで伸ばせば手の届くほどの近くにいた彼に対して、男は初めて関心を向けていた。

「それにしても今になって。新しく我らの同胞となった人物は余程の酔狂者らしい」

莫迦にされている。握った拳から力が抜けた。不愉快だが貴族にいちいち突っかかるのも、それはそれでばかばかしい。ここでの用は済んだ。食べ物にはありつけなかったが、情報は手に入れた。ユリスリートは亭主に礼を言って背を向ける。

王都エルナ・デュガーレに夜は来ない。外界から閉ざされて以来、時は停止した。そして大鐘楼の鐘だけが時の経過があると錯覚させている。彼が飛びこんだのは、そうやって懸命に造り上げた欺瞞の上に成り立つ日常だったのだ。

「待ちたまえ。私はそういう酔狂が嫌いではないよ。そも、こうして今ここで私と君が出会ったのも、女神の酔狂による巡り合わせと言えるだろう」

ユリスリートの出で立ちを確認するように、冷たい瞳がさらりと一撫でして離れて行く。だが彼自身への興味が失せたのではなさそうだった。

「君を歓迎しよう。私は今宵、ささやかな晩餐(ばんさん)に君を招待したく思う」

はじかれたように傍らの部下が顔を上げる。閣下と呼びかける声も表情も固い。しかし見向きもせずに軽く掲げられた手が、その諌言を簡単に封じた。訪れた沈黙を破って鍋を打つ音が一つ、一同の注意を引く。仕切り卓の内側で成り行きを眺めていた亭主が口を挟んだ。

「さっきも言ったが、その兄ちゃんに食わせる分はもうないぜ」

「では訂正する。私と二人の部下、それに彼を含めて四人分。注文は以上だ」

今度はもう一人の部下が戸惑ったように、よろしいのですかと伺いを立てた。
「かまわん」
切り捨てるようにきっぱりとした声音に、部下達は沈黙するしかなかった。
茫然と、あまりに意外な展開にただ茫然としているうちに、当事者であるユリスリートを置いてけぼりにして話がまとまってしまった。我に返って口を開こうとした鼻先に、汚れた食器を押しつけられる。
「手伝え、タダ飯食らい」
なぜここに居合わせる連中はこうも身勝手なのだ。そう憤慨しかけたユリスリートに、ラスティオは声をひそめ「黙って受けておけ」とささやく。彼の意志を軽視したこの理不尽に甘んじる理由はない。ないが、ちらと垣間見せた目の、その真摯さがユリスリートを押しとどめた。
「嫌いじゃねえって、あんたこそなかなかの酔狂モンだよ隊長さん。見ず知らずの野郎に飯奢ろうなんて、一体いつからそんな慈善家になったんだ？　確かにこの兄ちゃん、しょぼくて哀れっぽいがよ」
「君や君の父上を見習うと言った手前、かな」
「それこそ奇特なこった。けど、俺は親父とは違うぜ。何せこちとらの相手はそこにいるような」
卓を埋めていた大半は警邏隊員達とは入れ違いに店を出たが、まだ数人が残っていた。彼らはすっかり冷めた煮込み料理を、ときおり思い出したように口へと運ぶ。警邏隊長が下町へ姿を見せるのは稀で、おまけに新参者がからむ事態となった。どうやらことの顛末を見とどけるつもりらしい。ラスティオはそんな、物見高くも抜け目ない連中を顎で指し示した。
「ろくでなしのばかやろう共ばかりだ。慈善事業なんぞとは程遠いやね」
傭兵達はどっと笑い、ひどいあんまりだと口々にぼやく。実に楽

しそうだ。
「正直に答えれば、私も慈善事業のつもりはない。彼は一月ぶりの来訪者だ。この一月、外で何が起こっているのか何が起こっていないのか」
なるほどと、ユリスリートは納得した。彼はシェルナム王国とそれを取りまく周辺国の現況を知る唯一の人間だった。
「知りたいのは私だけではない。そうだろう」
うっすらと笑みを浮かべる警邏隊長に、亭主は片付いた卓へつくよう勧めた。

〈十一〉ユリスリート

石の一本柱がまん中で低い天井を支えている。この石柱に中心を貫かれる円卓をはさんで、入り口側と厨房側に工作用の作業台としか思えない、頑丈だけが取り柄のような大卓が一脚ずつ鎮座していた。厨房との境界を引く間仕切りを兼ねた卓もまた、その役割を実直にこなそうとどっしりと構えている。壁と天上は漆喰の白が殺風景ながら、板張りの床と腰羽目の沈んだ色調や、不意に波紋を広げる木目が目に優しい。

交易によりもたらされる香辛料は、シェルナム王国の庶民の食生活にまで浸透している。供された煮込み料理はその独特の香りと味わいを損なわず支配されず、程良い塩梅で効いている。踊る湯気は刺激的であり、命の糧となるために捧げられた命が器の底にひしめいていた。

味、量、値、どれをとっても文句のつけようがないと評判の「兎の尻尾」亭の料理にあえて苦言を呈すなら、主な客層に対してやや品が良すぎることくらいであろう。しかしそれは食肉不足が原因である。この状況下で、大の男共の胃袋を満足させるために亭主のラスティオが費やす工夫と、採算を度外視した「公共心」は並々ならぬものだ。慈善事業というのもあながち的外れではない。

「庶民の味というのも悪くない」

警邏隊長の感慨深げな呟きに二人の部下が同意する。ユリスリートはその様子を遠くから眺めていた。「遠くから」とは彼の印象であって正確さを欠く。何せ貴族であろう警邏隊員達にとっては破格の待遇である。どこの馬の骨とも知れぬ彼に同席を許しているのだから。

普段ならば嵩高い男十人が袖触れあわずゆったり座れる大卓に、ユリスリートを含めた四人が座している。和気あいあいとした雰囲気を望んでいるわけではなく、額突きあわせて話さねばならぬよう

な重大な秘密なんぞも知らない。ないが、なぜ話を聞かせるべき相手から、わざわざ最も離れたところへと追いやられるのかと首を傾げたくなる。

真正面では作り物めいた顔が、優雅な手つきでウサギの煮込み料理を堪能していた。物を食しているのが不自然に思える。そんな造作だ。警邏隊長の手前で、横顔を見せて向き合っている二人の部下も整った顔立ちではあるが、まだ人間味が感じられた。そしてこの二人とユリスリートとの間には三人分の空席がある。

ユリスリートはおおかたのところを語り終え、皿の中身もほぼ平らげていた。そして返ってきた反応が庶民の味云々だった。彼が遠いと思う理由としては妥当であろう。

「こちらから質問しても構わないか」

ユリスリートにも知りたいことがある。警邏隊は王都の治安保持が本来任務である。それは今も機能しているのかどうか。官憲に対する反応としては、さきほど店をあとにした傭兵達の態度はやや過剰に思えた。

向かって右側の部下が初めて顔を上げる。

「日常のことに関してならば、そこにいる連中にでも尋ねるがいい」

ユリスリートの視線に、矛先を向けられた男らはにやにやと曖昧に笑っている。円卓に三人、厨房側の作業台もとい大卓には二人が居残っていた。破落戸（ごろつき）と大差ないような連中を簡単に信用するほど、ユリスリートは世間知らずではない。相手は選んだつもりだった。だが貴族が対等と認めるのは同じ貴族のみである。彼らにとって平民以下など人に非ずで、なれなれしく口を利くなとでも言いたいのだろう。そしてそれが当然だった。うっかりしていたユリスリートにこそ非がある。それが貴族なのだ。

「君は賢明だ」

王都は閉ざされ女王は生死不明という国家の一大事が起こって三ヶ月が経過した。シェルナム王国がどのような状態に置かれているか、ユリスリートは知っていることを端的に説明した。二大貴族は

まだ表面上は協力体制にあること、ゆえに戦は起こっていないこと、他の三つの王国に表立った動きはないこと。警邏隊長はこれらの話にまったく興味を示さなかった。
「質問の相手として我々を選ぶ、君のその選択は正しい。しかし適材適所という言葉がある。そしてそれ以前に決まり事があってね。つまり君は我々にとって管轄外なのだよ」
ずっと無反応だった警邏隊長はそこまで言うと、料理と一緒に配膳された水の瓶に手を伸ばす。左側の部下が慌てて腰を浮かせかけたのを無言で制し、手酌で銅製のコップに水を注ぎ入れた。ユリスリートは黙って先を待つ。
「外から来る人間に対して、責任を負う範囲を分担することとしたのだ」
まず商人や旅人などの一般人は商工会が、南方人はミーザム街を占拠しているライサラ一派が引き受けて、王都で生活していくための補佐をすることとなっていた。
「我らは公人に対してその責を負う。君が一般人なら商工会の三老の誰かを訪ねるといい。そうだな、今夜はもう遅い。明日にでも」
語尾に重なるように遠く鐘の音が聞こえてきた。鳴り納めの九の鐘であった。ユリスリートの視点が警邏隊長をこえて、ふたたび一カ所だけ切られた窓へ注がれる。相変わらず朝とも昼ともつかぬ薄ぼんやりとした街並みの一部分があった。
「だが君は何も知らずここへ来たわけではあるまい。もしその目的が財宝なら」
「どういう意味だ」
「失敬。だがその手合いは多いのだよ。町をうろつくならず者の大抵が、このどさくさに王宮から宝飾品をかすめ盗ろうとやって来た。君は違うと」
「違う」
即答したユリスリートに極上の笑みが返される。極上の、無機質な笑みであった。

「よろしい。ならばもう一人の人物の名を君に教えよう。おそらく君にとってもっとも有益な人物となるだろう。グラシェスという男だ。詳しいことは」
赤銅色のコップをやや骨張った指が軽く叩く。鈍い金属音に中の水がかすかに震えた。波紋の勢いを借りるように、水色の瞳が間仕切りへと向けられる。ちょうど漆喰壁の向こうから亭主の大きな身体が、前掛けで手を拭きながら現れた。
「ラスティオ君、きみはグラシェスとは昵懇(じっこん)の間柄だったね」
突然の問いかけに、亭主が顔をしかめる。
「昵懇てほどでもないですがね。あいつがどうかしましたかい」
「彼に」
目線でもってユリスリートを指すと、ラスティオは即座に了解した。それを潮に二人の部下が立ち上がる。
「君の話は参考になった。この危機に瀕して未だ国土が戦乱に見舞われていないのは女神のご加護であろう。尊い血が流れぬうちに我らも使命を全うしたく思う」
「尊い血」のあたりで誰かが鼻を鳴らした。左側の部下がまなじりを上げてふり返ったが、傭兵達は素知らぬ顔だった。警邏隊長とユリスリートがほぼ同時に立ち上がり同方向に動く。警邏隊長は椅子の左側へ、ユリスリートは右側へ。片方の眉がわずかに跳ね上がり、作り物のような顔に生身の表情が生まれる。ユリスリートが剣を右に佩いていると気づいたせいだった。
「そういえば、まだ名を聞いていなかったな。私はバナムス・レクトロノワ。この非常事態に際し王都警邏隊を仮に預かる者だ」
ユリスリートは後悔していた。出る杭は打たれると言うように、下手に目立って良いことなどない。
王都の警邏隊長は近衛隊長と同格である。それは有事においての軍団長と同格であることをも意味する。レクトロノワなる男は素性こそおかしなところはなさそうだが、どう見てもまだ三十にすら届いていない若輩だ。傭兵団の団長ならいざ知らず、国家の重鎮とし

て名を連ねるとなるとやはり無理がある。火事場泥棒のように言われたとき、ではお前はどうなのだと訊きたかったくらいだ。そんな相手とよしみを通じる気はない。

だがまさか名乗り返さぬでは、先方の面子が立たない。二人の部下もとうぜん黙っていないだろう。

「ユリスリート」

仕方なくぶっきらぼうに応える。彼が持つ唯一のものである。唯一の、彼にとってだけ意味のある、ただの名である。そのはずであった。

「ユリス、リート？」

顔貌がまだらに乱れる、それはまさにそんな現象だった。端正な顔が複数の意図にひき裂かれ、歪みねじれていた。次いでよろける身体を支えるように卓に両手をつき、顔を伏せ肩を震わせる。

小さく、笑っていた。

「ユリスリート。ユリスリート！　素晴らしい」

不審と好奇のまなざしがユリスリートに突き刺さる。だが何が起こっているのか彼にだって分かりはしない。自らの名が、唯一彼にのこされた「かけら」が、いったいこの男に何をもたらしたのか。

「今宵ここで君に会ったのはやはり女神の酔狂に違いない。だがしかし。私にとって君にとって吉凶いずれであるかは、もとより女神ですらご存知ではあるまいよ」

震える声で一息にまくし立てると、何事もなかったかのようにしなやかな長身はすっくと背筋を伸ばした。相変わらず面白味のない美貌の中で、水色の瞳の奥に燃えさかる昏がりが見え隠れしている。あまりにも生々しいにんげんの顔であった。

「ごきげんよう、ユリスリート君。君の前途に女神と精霊の加護あらんことを」

自らと並べて吉凶云々と言いながら、ユリスリートの前途を言祝ぐ。空々しさすら潔い。ユリスリートの、周囲のすべての者の戸惑いを押し流すほどに。

「あんたもね、警邏隊長さん」
真四角に近い扉の前で、レクトロノワがふり返る。極上の笑みはもう無機質ではなかった。背筋を凍らせるような凄惨さがあった。
緋色の後ろ姿は来たときと同様に颯爽と消えた。だが残像が一同の網膜に焼きついている。
卓上には水がなみなみと湛えられた銅製のカップがある。澱みない所作、言動、思考。少なくともレクトロノワという男は愚鈍ではない。むしろ明晰であり、何らかの才覚を感じさせる。
だが水は湛えられたまま、置き去りにされていた。
楽しげに話しかけてくる亭主に謝罪し、ユリスリートもまた居酒屋「兎の尻尾」亭をあとにする。聞いておかねばならない話はまだ尽きぬが、今日はもう充分だ。
暮れぬ町に再び踏み出す。入り口の上部にぶら下がる看板のウサギから目を逸らして、灰色の空を見上げた。
王都での第一日目が過ぎようとしていた。

〈十二〉大鐘楼

少年の甲高い声が呼ばわっている。聞こえていないのか男は凝(じ)っと眼下の街並みを見おろしていた。

確認できる限り変化はない。白茶けた空き地の向こうにくすんだ青や緑、赤など色とりどりの屋根が連なっている。雲に蓋され陰影のあやふやな景色の中、ときにはっとするような闇が枝葉を広げる樹木の懐でとぐろを巻いていた。縦横に走る空とおなじ灰色の街路のおおくは、やがて中央広場から放たれる大路へと合流する。王都北端の王宮が霞んで見えるのは湿度の高さと光度の低さのせいだろう。

「は、か、せ」

間延びした調子はどこか楽しそうだった。ところが駈けてきた軽やかな足音が、あと数歩というところで止まった。ふり返れば真夏の鮮烈な空を思わせる青い瞳が不安げに見上げている。はかせ??博士と呼ばれた男は鼻眼鏡を外して養い子である少年へほほ笑んで見せた。

「すみません。ちょっと調べ物をしていたので」

「こんな何もないところでですか」

少年はきょろきょろと辺りを見まわす。王都でもっとも高い建築物である大鐘楼の屋上だった。背後には塔屋が、そのさらに上は鐘楼台になっている。ほかに何もない。そこで少年ははたと気づく。博士は市街地を見おろしていたではないか。しかし縁(へり)は少年の背丈よりも高く、以前よじ登ろうとして血相変えた博士に咎められたことがあった。

危険だから一人で縁に近づいてはいけない。もしどうしても見たければ抱き上げてあげよう。博士は懇願するように言ったものである。少年はもう八歳だ。大人の人に「だっこ」されるなんて恥ずかしい。「だっこしてくれ」などとお願いするのはもっと恥ずかしい。

困ってしまって、もじもじと足下に目を落とした。
「ルルージャ君、いいですか。科学とは万物が対象なのです。ここには何もない。本当にそうでしょうか。私たちの目に見えなくても時は行き過ぎ、また巡ってくるのです。風は吹き、匂いは漂い、音は聞こえます」
ルルージャ少年は師である博士の言葉にもう一度ぐるりと視線をめぐらせる。耳をそばだて鼻をくんくん鳴らしてみた。
「やっぱりなんにも見えません。音も聞こえないし、においもしないです」
「そう。実はいまは何もありません」
少年の素直な反応に博士は解答を与える。
変化は一瞬だった。そしてその痕跡を探していたが見つからなかったのだ。だが少年はからかわれたと思い、ひどくがっかりした。博士の骨張った手がひよこ色の巻き毛に守られた小さな頭をなでる。
「現在ここに何もないということを、私と君は確認したのです。それもまた観察において重要なことなのですよ」
屈みこんで視線を合わせるその目もとは和らかい。返すルルージャの笑みはぎこちない。
「ぼく、お役にたてましたか。じゃましてないですか」
博士ははっとして、それからゆっくりと肯いた。
「ええ。勿論ですよ、ルルージャ君。君はいつも私の助けになってくれてますとも」
とたんに表情を明るくしたルルージャ少年に、博士もまた内心で安堵した。
塔内へ戻ろうと促すと、少年はまた元気に駈けて行く。
気のせい、だったのだろうか。
あれは午後七時の鐘を打とうと鐘楼台に上ったときのことだった。吹き抜けた一陣の風に思わず壁にへばりついた。熱い突風だった。
外界はもう真夏であろう。あの一瞬。世界は繋がったのではないのか。あるべき場所へと。

時の流れに置き去りにされたかのように、エルナ・デュガーレの天候、気温、湿度は異変後まったく変動がない。同時に無風状態がつづいている。そうなってはじめて博士は、ただ研究だけに没頭してきた自らの過去を振りかえった。友もなく愛する妻や恋人もなく、ただ「博士」という称号だけに集約される人生の味気なさ。そんな彼が孤独と絶望に圧しつぶされなかったのは、ルルージャと出会えたからだ。

塔屋の扉から覗く顔は少し眠たげである。

無力さに罪悪感を持つ幼子の、その健気さが哀れでならない。子供が子供であることを許さないこんな状況は間違っていると憤りを強くする。

何とかしたい。

見上げた先には鐘楼台の屋根に陰る大鐘の、その内側から吊り下がる赤銅色の舌(ぜつ)が、雲に濾されてもれ落ちる明るみにくっきりと浮かび上がっている。せめてルルージャや市街地で怯えて暮らす子供たちに、こんな紛い物ではない本物の「時間」を取りもどしてやりたかった。

一日の終わりを告げる九の鐘を鳴らし終えたあと、ルルージャの入れた茶を飲んで日誌を書くのが博士の日課だ。当初は混乱していて日誌どころではなかったが、それでもはや九十頁になろうとしている。

「今日は夜更かしさせてしまいましたね。大丈夫ですか」

あの熱風は願望がみせた幻覚だったのかもしれない。疑いつつも反芻する。目を開けていられないほどの強い吹きつけを。肌が引きつれるような乾いた熱さを。

だいじょうぶです、眠くないです。言いながら目をこする少年に微笑みかけ、博士は屋上へと続く扉を閉じた。

名目の夜が来る。人々は肉体の呪縛を堅持し、それにしがみついていた。

生きている。

まだ、生きている。

〈十二〉大鐘楼（後書き）

第二章終了です。ここまでお読みくださり、ありがとうございました。

次回から第三章になります。まだまだ続きますが、この先もお付き合いいただければ幸いです。

〈一〉ガナ・ハ・シゥメ1

まず匂いだった。腐敗一歩手前の、甘さを包含した脂の生温かい匂いはそれ自体が息づいていた。不快であった。生命力そのものが溢れ出している。生存本能が先鋭化したとき、他を押し退け踏みにじってでも生きようとする純粋な凶暴性が顕わになる。

ふり下ろされた凶刃に込められたものが何なのか、ユリスリートは即座に気づいた。なるほど勝手が違う。ヒトをはるかに上回る強力(りき)は確かに恐ろしいが、それよりももっと根源的な脅威を感じた。

あの男の忠告になぜ逆らったのか。今さらな後悔は耳もとを掠めたうなりに霧散した。濃厚ないのちの臭いが追い迫る。一瞬前まで彼の足下にあった床板が砕け散る。異形が身悶えるように低く咆(ごう)えた。

食わせろ。そう言っている。おとなしく食われろと。

おそらくは生まれて初めて、ユリスリートは捕食される側に立たされていた。

ウサギの凶悪な目がアスナンの鬱々とした気分に追い討ちをかける。ふだん思い出すこともなく素通りするのに今日に限って見上げてしまった。心のしこりは無意識の行動に影響するものなのだろう。こうした些細なことが問題解決の糸口となるときもあるが、ウサギのまなざしには何らの示唆も感じられなかった。

数軒先の鋳物屋から来客を告げるかろやかな鈴の音がもれ聞こえる。賑わいを見せることのなくなった通りにちらほらと行き交うのは、佩剣し具足を身につけている傭兵達だ。さすがに金属製の全身装甲などと大仰な出で立ちの者はいないが、やはり空気は物々しい。王都が閉ざされて、はや百日にならんとしていた。

まだ十一の鐘が鳴って間もない時刻ながら、「兎の尻尾」亭の客

席はそれでも半分が埋まっている。亭主のラスティオが仕切り卓のあちらとこちらを行ったり来たりと、相変わらず忙しそうに立ち働いていた。冗談めかして、いっそのこと店を手伝おうかと言えば虎髭の巨漢は鼻にしわを寄せる。

「誰が野郎なんぞを雇うかい。それくらいなら忙しさに殺されたほうがましだぜ」

もともと店は女房と二人で切り盛りしていた。そこに他人を入れたくないという心情があるらしい。「兎の尻尾」亭の亭主は荒くれ者共をどやしつける程の強面ながら、家族との絆を殊のほか大切にしていた。

「そういや昨日、新入りが来たんだぜ」

図書館長の昼食はまだ用意が調っていないということで、仕切り卓の端に腰かけて待つことにする。そんなアスナンに配膳の合間ラスティオが話しかけた。しかし彼にとって今まさに触れてほしくない話題だ。さり気なく視線をそらして気のなさそうな相づちをうつ。

「何でえ、ノリ悪ぃなあおい。いまごろ新入りだぞ」

厨房側の大卓でちょうど食事を終えた三人連れが、アスナンとは正反対に興味を示した。

「またどこぞのお尋ね者じゃねえのか」

「そんなふうには見えなかったがな。まあ往きはよいよいの行きっぱ片道に乗りこんで来たんだ。ただの坊やじゃねえだろうさ」

言いながらラスティオが入り口のほうへと目をやった。

「めんどうな輩だって、苦労するなぁグラシェスの野郎さ。俺達にゃ関係ねえ」

「へ。ざまあみろだぜ。あいつはどうも好かねえ」

「そうかよ。気が合うな」

三人が三人とも飛び上がるほどに驚いた。忽然と現れた噂の主の半眼が、あんぐりと口をあけて絶句している男らを見おろしていた。実につまらなそうに。

反応が返ってこないとなると、無造作に椅子を一つ引いて大きな

身体をどっかと落ち着ける。それを合図に背後に控えていた四人の手下が、間抜けた顔のならぶ真正面に陣どった。やれやれと言いたげなラスティオに五人分の代金を渡したグラシェスは、居心地悪そうな三人組へさも面倒くさそうにつけ足す。
「俺もむさ苦しい野郎は好かねえ。だからお互い気分よく過ごすためにもとっとと失せな。その阿呆面みてると飯がまずくなるぜ」
空席はほかにもある。選んで同じ卓についておきながら、ずいぶんと勝手な言い種だった。さすがに険呑さが漂う。
「グラシェス」
アスナンは渋々声をかけた。
「新入りはそっちへ行ったか」
「なんだ、いたのか。昨夜はどうした」
尋いたことには答えず、まったく別の質問が返ってきた。例の三人組のことなど、もう眼中にはないかのようだ。
「すまん。昨日は思ったより手間取ってな。それで」
「そうか。まあ酒はまだ残ってる。近いうちに寄れ」
グラシェスの態度は男達にとってどこまでも業腹だったが、乱闘になれば三対五で圧倒的に不利である。空になった食器類を引いて「食ったら働け」とラスティオにはっぱをかけられると、男らは黙って席を立った。
「井戸端の洗濯女じゃあるめえし、うるせえ連中だぜ」
その口調は軽い。喧嘩にはならない、グラシェスは端からそう確信していたのだろう。良くも悪くも傭兵らしい男である。自由で気ままで好戦的で、それでいて計算高く自制的だ。アスナンは呆れたように咎め立てるようにその名を呼んだ。
「ん、ああ新入りか？　来ねえよ。こっちをとおりすぎて王宮まで行っちまったらしいぜ。今頃ここに来ようなんて、どんな物好きの間抜けかと思ったが、自殺願望の手合いだったかもな」
「王宮へ？」
アスナンとラスティオの視線に、グラシェスは他に情報はないと

ばかり肩をすくめてみせた。手下の一人が、何も知らずに王宮へ行ってしまったのではないかとの予測を口にする。
「確かに昨夜は王宮のことまで話さなかったな」
独り言のようにラスティオが呟いた。
王宮へは行くなと言ったはずだ。いや、本当に言ったか。ほんの数時間前のことなのに、アスナンは正確に思い出せなかった。悔恨を呼ぶ自らの言葉が、ユリスリートと過ごしたほんの僅かな時間の中で反響していた。
お前になにがわかる。
分かるわけがない。この特殊な状況を一晩過ごしただけで把握できようはずがない。吐き出した言葉は小さな棘となって彼自身に突き刺さっている。
閉ざされた空間に生きることは緩慢な死の予感に絶えずさらされ続けていることでもあった。そしてその予感はもはや、それほどに無情なものではなくなっている。百日という時がもたらした諦念という安らぎであった。抗うよりも受け入れたほうが楽なのだ。
「くそ。なんでこうなるんだ」
ユリスリートはその諦念を、逃避を、非難したわけではない。過剰に反応したのはアスナンの都合だ。
気づいたときには席を立っていた。なんで走ってるんだ。思いながら走っていた。王宮へと。

〈二〉ガナ・ハ・シゥメ2

アスナンにとって今朝は特別だったと言える。すっきりとした目覚めだった。爽快ですらあった。理由は簡単だ。昨日は一滴も飲まなかったのだ。久しぶりに湯を使ったのもよかったのだろう。頭も身体も軽く、空腹感ですら心地良い。吐き気をともなって意地汚くわめく腹の虫に、真実おのれの体内に得体の知れぬ何かが棲みついているのではと思えた昨日までの目覚めが嘘のようだ。

それが何故こんなことになっているのか。

落ち着け。

アスナンは呼吸を整えつつ自らに言いきかせる。

栄華の象徴デュガーレ宮殿は、広大な敷地内に歴代王の居城マリヤム・ガナをはじめとする三つの城館のほか、塔、館、庭園に四阿（あずまや）と多くの建造物が点在している。当てもなく走り回ったところで時間と体力を浪費するだけだ。

中央広場から真っ直ぐ北上する一本道の終わりには、何もない石畳の空間が開けている。一街区をすっぽり収めてしまうほどの車庫兼車回しである。そしてその向こうにようやく第一の城館ガナ・ハ・シゥメの曇天に溶け入るような姿が見えた。

北へ向かってコの字型に開いたもっとも新しいこの城館は、顔ともいえる建物正面に木目のような模様がうっすらと浮かび上がる白大理石が用いられている。「煙の城館（ガナ・ハ・シゥメ）」の呼び名にふさわしく陰鬱な空のもとでは輪郭が不鮮明だった。動く物のない静寂を見わたし、アスナンはいまさら腰に手をやって帯剣を確認する。

足どりも気分も軽く仮宿をあとにして東大路へ出たところで、北東地区の方から人影が現れたときも、やはりこうして剣の柄にふれた。それがアスナンの上機嫌に少しばかり影をさした。船上では船長以外に帯剣は許されていない。ナイフは縄を切ったり食事に使用するので常に携行しているが、日常において対人の武器は持たない

のが普通だった。それが今や当たり前に剣を持ち歩き、行き会う他者をいちいち警戒している。人間がひどくせせこましくなったようで遣りきれない。

相手は確実にアスナンを視認していながら平然と同じ歩調で近づいて来る。そして互いの顔を識別できる距離になってから足を止めた。薄汚れた日除け付きの丈長いマントの上に少年の名ごりを留める顔があった。忘れようにも忘れられない青と緑の瞳。アスナンはほっと安堵の息を吐いた。

思い返せばあの時点でのユリスリートは、一度会っただけの赤の他人で安堵できる根拠など皆無である。我ながら甘いとアスナンは思う。グラシェスあたりに言わせれば、その甘さこそが「らしい」のだが。

寄りかかっていた鉄柵から手を放す。背筋を伸ばす。甘い人間に自己評価などできない。ただ甘いという自覚だけがあった。そしてここにこうしていることは、その甘さゆえなのだろう。

ガナ・ハ・シゥメは異形がほぼ掃討されている、王宮内ではかなり安全な建物だった。ここにいてくれと願うばかりだ。アスナン自身は剣技において些か自信を欠く。そこそこ扱えるが生き物を殺すあの手応えがどうしても慣れないのだ。たとえ森羅万象に背いた歪なる存在でも、生きているという事実は重い。

上品なことを言うつもりはアスナンもない。だが洋上で海賊に襲撃されるなどということが頻繁に起こるわけもなく、運良く十数年のあいだ一度もそんな事件に遭遇しなかった。王都に閉じ込められるまで実戦を経験していなかったのだ。虫の類を除外すれば、彼がかつて直接手を下した生き物は釣り上げた魚くらいである。

中央広場からの一本道もそうだが、この石畳の車回しも微妙に傾斜していた。鉄柵から白亜の建物まで一気に走りきって、アスナンは再び足を止める。酔いどれ生活のつけが回ってきたと実感した。息切れがひどい。

両開きの扉は片方が蝶番から外されて中が見とおせた。アスナン

は扇状に広がった段差のゆるい階段をのぼり、薄暗い内部の様子を残された扉の陰からうかがう。吹きぬけの玄関広間は薄暗く静かだ。埃のふり積もった床に顔の一部が欠けた彫像が一体、無言で横たわっている。肉感的なくちびるにうっすらと微笑みを浮かべていて、それがかえって恨めしそうだった。

見慣れた光景にふっと吐息が一つもれた。だがその間隙を衝いておこった激しい物音に、緊張の糸は再び限界一杯まで張りつめる。

遠い。何の音だ。どちらから聞こえた。

心臓が高鳴る。

何かが壊れる音、強い衝撃に硝子が砕け散った音だった。そうと判断し、やおら薄暗がりへ身体を滑りこませた。偶然に起こる音ではない。探し人はここにいるのかと耳をすます。自らの呼吸音をうっとうしく感じながら、何らかの音がもう一度聞こえてくるのをじっと待つ。長い。呼吸一つが、鼓動一つが長かった。

何かが倒れた。

瞬間、アスナンは床を蹴った。左へ、西へまっすぐ続く廊下を駈けた。大理石の床が埃ですべる。何度も足をとられかけ、転んでいる暇などないと踏みとどまる。もはや静寂は堰を切ったように連続する一種類の音に塗りかえられていた。剣戟（けんげき）の響きだ。

剣戟。

その違和感を抱えたまま、考える余裕もなく最西端三つ手前の部屋へ飛び込んだ。

床にうずくまる黒い塊が、あらたに現れた獲物に反応する。消えた。そう思ったときには天井をはねて襲い来る。

迂闊にもアスナンは剣を鞘に収めたままだった。

〈三〉ガナ・ハ・シゥメ3

広い王都で二日続けて会ったのも何かの縁だろう。腹ごしらえできる場所を探しているという若者と連れ立って、アスナンは南東地区の入り組んだ街並みを歩いた。前夜の首尾を尋ねると戸惑いの表情を浮かべ、それでも良い店だったと答える。

おそらく年齢(とし)は二十歳くらいだろう。しかし困惑に言葉を詰まらせる様子は、ひょっとしたらもっと若いのかもしれないと思わせる。中央広場で出会ったときの隙のなさやその身なりこそ傭兵らしかったが、こうして間近に話すと若者はどこか世慣れない雰囲気をまとっていた。

自己紹介がまだだったと気づき、狭い路地を何度も曲がって目当ての店が面する通りへ出たところで、遅ればせながら右手を差し出した。若者はさらに困ったように視線を落とす。しばしの沈黙のあと溜息一つで覚悟を決めたかぶっきらぼうに、ユリスリートと名乗った。

宙に浮いたままやり場をなくして手持ち無沙汰の右手を引っこめるべきか否かアスナンは悩みつつ、居心地悪そうに立ちつくす若者をしげしげと眺めた。

ユリスリート。

それは禁忌の名であった。

シェルナム王国第三一代国王ユリスリート一世と同名であるがゆえに。かの王が「兇王」と呼ばれる異端の王であったがゆえに。

間一髪、割って入ったなにかが塊をはじき返す。その衝撃の強さは耳の奥に余韻を波うたせる残響音で推しはかれた。廊下に押しもどされたアスナンの目の前には丈長いマントの後ろ姿がある。その背で一つ束ねた髪が陽の光の下で見る炎のように揺らいだ。

「ユリス、無事か」
「アスナン？」
どうしてここにと続くはずだった言葉が獣のうなり声に遮られる。アスナンは目を瞠った。
獣？？その歪なる存在は獣と呼んでさし支えない姿をしていた。極端に短い脚と極端に長い腕、体長とほぼ同じ長さの尻尾、全身が黒い毛皮におおわれている。上背は十かそこらの子供程度であろう。加えてせまい額に扁平な顔面がアスナンに南方で見たある動物を想起させた。
「猿、か」
「さる？　なんだそれ」
だが眼前の獣はあの愛嬌のある動物とは明らかに別物だ。その剛毛からただよう脂混じりのすえた獣臭さは、貪欲なる渇望の証でありながら同時に死の尖兵である腐臭とも類似していた。小柄な全身から発される気勢はあくまで禍々しい。満たされることを知らぬ飢餓に苛まれてでもいるかのように。しかも人に非ずの存在が、武器を武器として扱っている。
王宮は異変以来、異形の巣窟である。それは覆し難い事実であり、だからこそアスナンも王宮へ入るたび化け物達を斬り伏せてきた。だがこれほどに好戦的で凶暴な異形は初めて見る。アスナンがこれまで接してきた化け物どもは、自らの縄張りを主張しそれを死守することはあっても率先して人間を襲ったりはしなかった。
「まあいい。尋きたいことはいろいろあるが」
ユリスリートが前方を見据えたまま低くつぶやいた。
「とりあえず自分の身は自分で守ってくれ。あんたを庇う余裕はなさそうだ」
「ここでお前に守ってもらったら、俺はただの間抜けだな」
たったいま庇われたがそれは大目に見てくれと、誰にともなく内心で言い訳をしてアスナンは剣を抜き放った。尋きたいことはアスナンのほうにも山ほどある。だが状況はそれを許さない。

「避けろ」
異形の獣が奇声を発して再び中空へと躍りあがった。錆びついた剣が床を叩いてへし折れる。破片が廊下の天井に突き刺さるほどの勢いではじけ飛んだ。うずくまるような姿勢で忌々しげに吠えた獣は、ユリスリートの剣がふり下ろされるより早く飛び退る。
咄嗟の警告に、扉がない出入り口沿いの壁を恃(たの)んで避けるのがアスナンにはやっとだった。そんな彼がようやく部屋へと一歩踏み入ったときには既に、ユリスリートが黒い塊を追いつめている。
縦横無尽の切っ先に思わず見惚れた。それは乱舞でありながら整然としていた。整然と無駄なく、けだもの畜生を嘲笑い眩惑するヒトの技だった。脂に黒光りする剛毛をなぎ払う。浅い。ならばとさらに一歩踏みこみ二閃三閃、赤黒い飛沫(しぶき)が散る。
手傷を負いながらも獣は二度三度と後方へ跳躍し、うつ伏した本棚に乗り上げた。金切り声を発して地団駄でも踏むように跳ねては歯をむく。折れた剣で本棚の背を打ちつける。威嚇のつもりだろうか。
「右から回りこんでくれ」
獣から目を離さずユリスリートが要請する。だが数歩も行かぬうち、アスナンはぎくりと足を止めた。部屋には廊下へ通じる南側ともう一カ所、北側に隣室へ続く出入り口がある。その扉が音もなく押し開かれた。
「ユリス！」
叫ぶと同時に影が跳ぶ。咄嗟に剣を突き出す。
威嚇ではなかった。仲間を呼び寄せていたのだ。扉からこぼれ出た塊は三つまで視認できた。迂闊な一頭をアスナンの剣が貫く。しかしその身でもって彼の刃を封じた。異形の重みに体(たい)を崩せば喉笛めがけて別の一頭が跳びかかる。避ける余裕も剣を引き抜く暇もない。
「ぎゃっ」とも「ぎょっ」とも聞こえる潰れた悲鳴を上げて、獣が不自然に落下した。のたうち転げ回るその尻に投擲用の短剣が刺

さっている。
「扉を閉じろ」
言われるまでもない。アスナンは考えるより先に走った。異臭が溢れ来る根源を閉ざそうと、夢中で剣を振りまわし取っ手を引く。身を割りこませる一頭の向こうにうごめく影はひとつふたつどころではなかった。背後には濁ったうなり声が迫る。
「こっちは俺が防ぐ。何とか扉を閉めてくれ」
重い布のひるがえる音が凶暴な気配とのあいだに割りこんだ。マントを肩から払ったユリスリートが立ちはだかったのだ。
鋼の打ち合う音が興奮した獣の叫びに混じり、無風の室内は濃厚な血の臭いに満たされ始めていた。それが異形どもをさらに昂ぶらせ、アスナンの胃の腑をちぢみ上がらせる。悪夢を見ているようだ。肉を裂く感触は、頭蓋の砕ける手応えは、生と死の反転であった。だが何よりも死線上に立たされたこの純然たる恐怖こそが、皮肉にもアスナンの精神を踏みとどまらせている。
痙攣する肉塊となった同族を踏み越えて、扉をこじ開けようとする新たな一頭の怪力に引きずられそうになる。しかも悪いことに取っ手がぐらつき出した。もともと施錠のかわりに取っ手を取りはずすという、実用よりは貴族の遊び心によって作られている扉であった。肩越しちらとふり返れば、ユリスリートは三頭を同時に相手取っている。折れた剣を振りまわす最初の一頭の攻撃を受けて、右手にある金属製の鞘はへこみ折れ曲がっていた。一対一ならば悠々圧倒していた剣技も、守勢にまわっては精彩さを欠いている。
「アスナン、まだか」
さすがに焦慮のにじむ声だった。しかし人よりも先に物が限界へと到達してしまった。取っ手がすっぽ抜けるように外れたのだ。そもそもが取り外しを頻繁にすることが前提に造られている。実に呆気なかった
手に残った金属塊を投げ捨てて、厚みのある縁を掴もうと手を伸ばしたが間に合わない。押し開かれた先は異界と通じてでもいるの

か。隣室の薄暗がりにうごめく影が一斉に吠えた。吐き気をもよおす澱んだ空気がふるえる。
なだれ込んできた数は十頭を下らない。それらがユリスリート目がけて殺到した。一定箇所に踏みとどまる必要がなくなると、その剣は枷がとれたかのように次々と敵を切り裂いた。しかし到底ひと一人にさばききれる数ではない。
「くそ。逃げるぞ」
振り向きざま脱出を宣言したユリスリートの背に塊がとりつく。おし殺した悲鳴は異形どものかん高い鳴き声にかき消された。一頭の獣がユリスリートの右肩に文字どおり食らいついたのだ。
「ユリス！」
その右手が鞘を手放したとき、予想外の衝撃が彼を苦痛から解放した。
ユリスリートの肩を咬み砕かんとしていた獣の後頭部に奇妙な形の刃物が突き立っていた。屈折した三つの刃が放射状に広がり円を形作っている。投擲に特化した武器であろう。
「こいつはまあ、いったい何事だあね」
この血なまぐさい一幕に不似合いな、間延びした口調だった。鋭いまなざしを向けたユリスリートとは違って、アスナンの表情がわずかに和らぐ。
「ヨール？」
「よおアスナン。無事だったかい」
ひょろりとした長身が身を屈めて入り口をくぐった。三人の若者があとに続く。短槍や長柄の複合武器を手にいかにも屈強そうな男達は、口々に異形の多さと充満する血なまぐささに悪態をついた。
「誰だか知らないが手伝え」
ユリスリートが肩から獣を引きはがし、床に叩きつけた。
「あっしの助太刀は高くつくよ、にいさん」
返す答えは相変わらずのんびりとしている。この異様で凄惨な光景にまったく動じていない。

「なんてね。ちゃちゃっと片づけようか」
肩の高さに上げられた両の手には、刀身と垂直に渡された金属部分をにぎる特殊な形状の剣があった。言うが早いか挑みかかる獣の腕を斬りとばす。つき従う若者らも淡々と武器をふるい始めた。
圧倒的に不利な状況は脱した。狩られる側から狩る側へ。しかし胸糞悪さが晴れようはずもない。血と肉と断末魔??これが閉ざされた世界のもう一つの日常だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3790k/

女王の盾

2011年10月27日19時11分発行